

「宗教と社会」学会
第20回学術大会
プログラム・要旨集

*The 20th Annual Meeting of
the Japanese Association for the Study of
Religion and Society*

Program and Abstracts

16-18th of June, 2012

Nagasaki International University

2012年6月16日（土）～18日（月）

長崎国際大学

「宗教と社会」学会第20回学術大会

2012年6月16日(土)～18日(月)

長崎国際大学

目次

日程表	1
会場案内図	2
個人発表 プログラム	3
テーマ・セッション プログラム	4
エクスカージョン概要	5
個人発表要旨	6
テーマ・セッション要旨	26
託児所のご案内	29
交通アクセス	31

連絡先

「宗教と社会」学会第20回学術大会事務局
〒859-3298 佐世保市ハウステンボス町2825-7
長崎国際大学人間社会学部 小島大輔研究室
e-mail: jasrs2012@yahoo.co.jp
TEL・FAX : 0956-20-5562
大会ホームページ <http://jasrs2012.seesaa.net/>

日 程 表

2012年6月16日(土)・17日(日)・18日(月)

長崎国際大学

会場：長崎国際大学 教室棟1・2号館

受付	教室棟2号館1階ロビー
本部	教室棟2号館1階2102
クローク	教室棟2号館1階2102
常任委員会会場	教室棟2号館1階2103
編集委員会会場	教室棟2号館1階2104
総会	教室棟1号館1階1101
個人発表会場	教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201, 教室棟1号館2階1201
テーマ・セッション会場	教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201, 教室棟1号館2階1201
休憩室	教室棟2号館2階2202, 学生食堂, お茶室
書籍・抜刷頒布コーナー	教室棟2号館1階2105
懇親会会場(16日)	ホテルローレライ(バスにて送迎)
昼食会場(17日)	教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201, 教室棟1号館2階1201(個人発表会場), 教室棟2号館2階2202(休憩室)

日程：

6月16日(土)

11:30～	常任委員会(教室棟2号館1階2103教室)
12:00～	受付(教室棟2号館1階ロビー)
13:30～17:20	個人発表(教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201 教室棟1号館2階1201)
17:40～18:40	総会(教室棟1号館1階1101教室)
19:00～20:30	懇親会(ホテルローレライ)

6月17日(日)

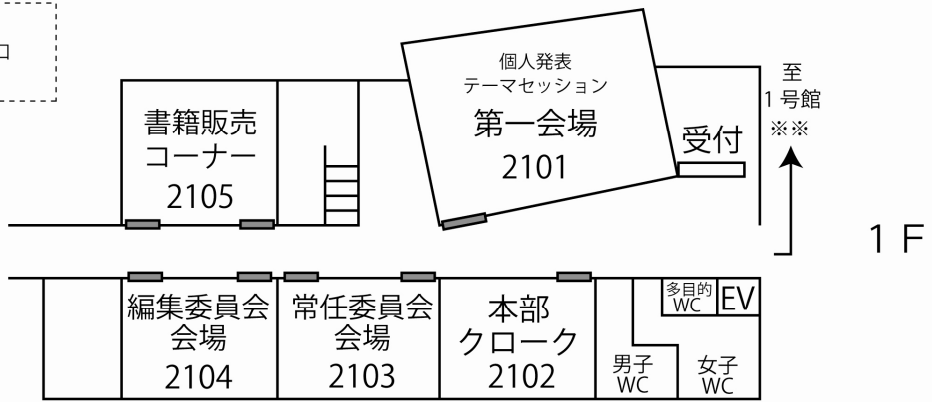
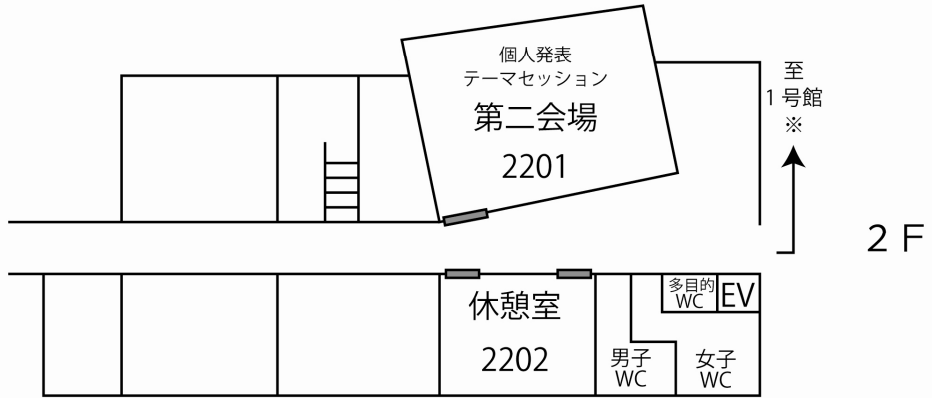
9:00～	受付(教室棟2号館1階ロビー)
9:30～12:20	個人発表(教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201, 教室棟1号館2階1201)
12:30～13:20	昼食(個人発表会場, 休憩室)
12:30～13:50	常任委員会(教室棟2号館1階2103)
12:30～13:50	編集委員会(教室棟2号館1階2104)
14:00～17:00	テーマ・セッション (教室棟2号館1階2101, 教室棟2号館2階2201, 教室棟1号館2階1201)

6月18日(月)

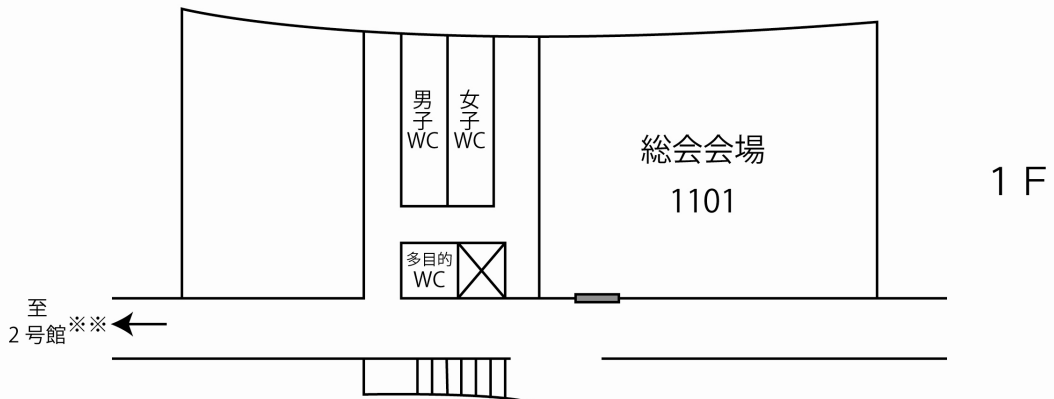
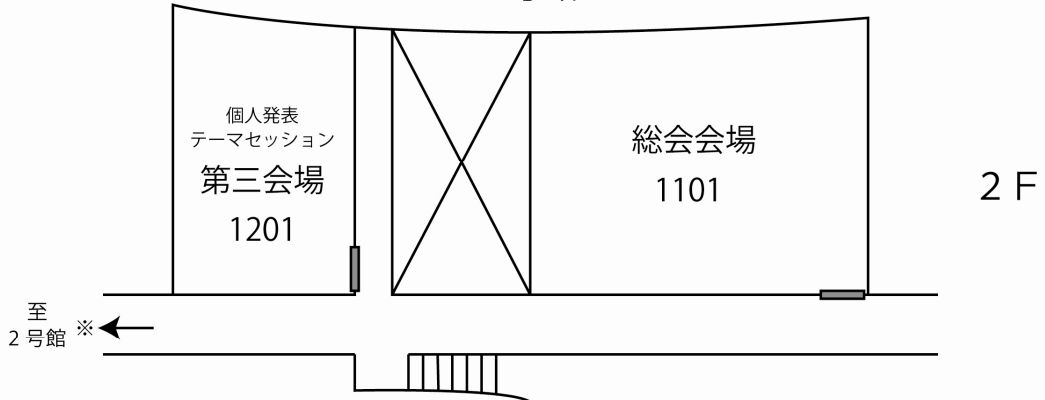
8:00～	エクスカージョン(ホテルローレライ(ハウステンボス駅前)集合)
-------	---------------------------------

会場案内図

2号館



1号館



「宗教と社会」学会第20回学術大会 個人発表 プログラム

発表：25分、質疑応答：25分

6/16 (土)

	第一会場(2101)	第二会場(2201)	第三会場(1201)
13:30～ 14:20	星野元興 (鹿児島大学大学院) 廃寺と寺院組織—「真宗王国」 の比較研究から— →p.6	石黒弓美子 (國學院大學大学院) 神社神道と国際化—アメリカ椿 大神社の例— →p.9	輪倉一広 (福井県立大学) ふたりの宗教家にみる準戦時 の救癪思想 →p.13
14:30～ 15:20	伊藤悠温 (北海道大学) 「葬式仏教」批判の再検討 →p.7	全恵松 (神戸大学大学院) 開港期済州島における仏教復興 の起源について →p.10	ヤニス・ガイタニディス (國 學院大學) 日本におけるスピリチュアル ・ブームと現代西洋エソテ リシズム →p.14
15:30～ 16:20	平藤喜久子 (国学院大学) 岡正雄を読み直す—現在の神 話学から— →p.8	中西尋子 (関西学院大学) 韓国系キリスト教会の日本宣教 —なぜ日本人信者を獲得できて いるのか— →p.11	平野直子 (早稲田大学) 代替療法における「近代的で あること」の問題化とその背 景—手当療法「レイキ」を事 例として— →p.15
16:30～ 17:20		真鍋一史 (青山学院大学) 東アジアにおける宗教意識と伝 統的な価値観—国際比較調査のデ ータ分析— →p.12	井上順孝 (国学院大学) 認知科学・脳科学と日本の新 宗教研究 →p.16

6/17 (日)

	第一会場(2101)	第二会場(2201)	第三会場(1201)
9:30～ 10:20	齋藤知明 (大正大学大学院) 「宗教的情操」概念の誕生—明治 20年代の教育言説から— →p.17	藤原佐和子 (同志社大学大学院) タイ北部における女性キリスト 者の思想形成—チュリーパン・ス イーンソントーンを事例に— →p.20	滝澤克彦 (東北大学) 現前と不在のあいだ—東日本 大震災に関する宗教学的試論 — →p.23
10:30～ 11:20	川崎のぞみ (筑波大学大学院) 在日ムスリムのイスラーム教 育の変遷—イスラミック・サー クル・オブ・ジャパンの事例— →p.18	吉田ゆか子 (筑波大学大学院) バリ島仮面舞踊劇トペンの演者 増加とその背景—1970年代との 比較から— →p.21	○横井桃子 (大阪大学大学院) 川端 亮 (大阪大学) 宗教的変数『『宗教的な心』は 大切である』の有効性 →p.24
11:30～ 12:20	章潔 (長崎国際大学) 長崎くんちとランタンフェス ティバルにおける祭り空間 →p.19	山下明子 (世界人権問題研究セン ター) 性にかかわる暴力と宗教の変容 —インドの農村の事例を中心 に— →p.22	井藤美由紀 (京都大学) 在宅での看取りを支えた死生 観と Belief—がん患者遺族イ ンタビューに基づいて— →p.25

「宗教と社会」学会第 20 回学術大会 テーマセッション プログラム

6/17 (日)

	第一会場(2101)	第二会場(2201)	第三会場(1201)
14:00~ 17:00	社会参加を志向する宗教の比較研究—エンゲイジド・ブuddiズム (社会参加仏教) を考える →p.26	慰霊とツーリズム →p.27	グローバル化とアイデンティティ →p.28

◆社会参加を志向する宗教の比較研究—エンゲイジド・ブuddiズム (社会参加仏教) を考える—

第 20 回「宗教と社会」学会・創立 20 周年記念企画

【第一会場 (2101) 14:00~17:00】

企画者：外川昌彦 (広島大学)、大谷栄一 (佛教大学)

趣旨説明

外川昌彦 (広島大学)

近現代インドの仏教にみる「社会性」—B. R. アンベードカルの仏教解釈から現代インドの仏教改宗運動まで
舟橋健太 (京都大学・研究員)

『アヒンサー』をめぐるストラグル—現代チベット仏教の社会参加をめぐる可能性と課題

別所裕介 (広島大学・助教)

社会参加仏教として見た台湾・佛光山寺

五十嵐真子 (神戸学院大学)

「開発」に参画する仏教—タイ「開発の時代」と開発僧

泉経武 (東京成徳大学・講師)

近現代日本における仏教者の社会参加—妹尾義郎の仏教社会運動の試み

大谷栄一 (佛教大学)

コメンテーター

宗教社会学から 櫻井義秀 (北海道大学)

仏教史学から 奥山直司 (高野山大学)

◆慰霊とツーリズム

【第二会場 (2201) 14:00~17:00】

企画者：木村勝彦 (長崎国際大学)

趣旨説明

木村勝彦 (長崎国際大学)

歴史の闇を観る—観光都市長崎における原爆慰霊の位置

西村明 (鹿児島大学)

沖縄の戦跡観光—慰霊から平和学習へ

寺石悦章 (琉球大学)

現代韓国の死者慰霊—済州島を事例として

田中悟 (神戸大学)

金世徳 (芦屋大学)

コメンテーター

文化人類学から 白川琢磨 (福岡大学)

宗教社会学から 山中弘 (筑波大学)

◆ グローバル化とアイデンティティ

【第三会場（1201） 14：00～17：00】

企画者：宮永國子

趣旨説明

宮永國子（ハーバード大学・国際基督教大学）

自己形成の困難から「生体政治工学」の問題圏へ：311以後の＜自己の身体＞の創造

永澤護（個の可能性研究所・東京福祉大学）

夫婦別姓をめぐる議論：家族と伝統を問う視座

薄井篤子（神田外語大学）

911以降の音楽とイスラームと国際社会：ユッサー・ンドゥールのアルバム「Egypt」を例に

島添貴美子（富山大学）

エスニックなかかわりの場としての教会：劇団セロ・ウアチパとキリスト教会

高崎恵（国際基督教大学）

エクスカージョン概要

日時：6月18日（月）

集合時間・場所：8：00 ホテルローレイ（ハウステンボス駅前）集合

テーマ：平戸生月キリシタン紀行

参加費用：3,000円（参加者少数の場合は催行できないため、返金する場合がございます。

より多くの皆様のご参加をお待ちしております。）

主な案内地（順不同、予定）：島の館（平戸市生月町博物館）、ガスパル様、幸四郎様、ダンジク様、
聖フランシスコ・ザビエル記念教会、平戸市街（寺と教会のある景観）
など

※詳細な内容については大会ホームページ (<http://jasrs2012.seesaa.net/>) にてご案内する予定です。

どうぞご覧ください。

個人発表要旨

【16日（土）第一会場（2101）第一報告（13：30～14：20）】

廃寺と寺院組織 —「真宗王国」の比較研究から—

星野元興（鹿児島大学大学院）

1. 研究の目的と背景

2010年浄土真宗東本願寺派永宮寺（太子堂正悟住職）が破産手続き開始に伴う廃寺に追い込まれた。宗教法人の破産のニュースはNHKの報道番組に取りあげられるなど多くの反響をよんだ。しかし、これはなにも特例ではない。現在、全国の多くの寺院が廃寺の危機にさらされている。

そこで本発表では時間的・地域的偏差が比較的少ないとされる真宗教団を中心に、すでに廃寺もしくは活動停止に至った事例を取りあげ、その経緯と寺院組織について考察を深める。

これまで寺院の興隆に関する先行研究は多く見られるが、寺院の衰退に着目した研究は多くない。その意味においても有意義な研究テーマといえる。

2. 問題の所在

一般的に廃寺に至る原因として、過疎による門徒（檀家）の減少、現代人の信仰離れなど主に信仰者側の社会情勢の変化が挙げられる。しかし全国各地に根付き、長期にわたり経営を続けてきた寺院の廃寺を社会情勢の変化だけで捉えてよいものか疑念を抱く。もちろん、外的要因として過疎による門徒の減少、現代人の信仰離れを廃寺の一因として捉えることを否定はしない。しかし、それ以上に寺院を取り巻く地域社会を含めた広義での寺院組織の問題が内的要因として挙げられる。そこで本発表では、「真宗王国」とよばれる富山県、滋賀県、広島県の廃寺事例を挙げ、明治期以降多くの真宗寺院が設立された鹿児島県の事例と比較することにより、その原因を明らかにする。

3. 研究内容

富山県、滋賀県、広島県は「真宗王国」と一般的に呼ばれる。また、明治期以降浄土真宗本願寺派を中心に布教が進められた鹿児島県も近年「真宗王国」と呼ばれる地域である。地理的に遠く離れた地域であり、何の共通性も見いだせないように思える。しかし、どの地域においても現在「廃寺」といった大きな問題に直面していることに違いはない。これら地域は農村を中心として構成される地域であり、廃寺問題を捉えたとき、過疎を原因とする門徒の減少によるものであろうと容易に想像してしまう。もちろん、過疎問題も重大な原因の一つであるが、それはあくまで外的要因である。一方で内的要因として、各寺院（各地域）の組織自体に歪みが生まれてきたことが指摘できる。

例えば、富山県においては本坊（親寺）の境内にりょう（寺中）を構える構図が見受けられる。りょうとは自らの寺で門徒を抱えることはなく、すべて本坊の門徒に対するサービスによって経営を行う寺院のことである。

また、類似した構造は広島県にも見受けられる。広島県においてはケキョウと呼ばれる制度がある。これは、所属する寺が遠方にある場合近くの寺院に法要を依頼する形態である。ケキョウを中心に行う寺院においては、富山県のりょう同様、自らの寺院では門徒を持たぬ寺院も存在する。

滋賀県は両県とは形態は異なるものの、寺院数の多さにより門徒が数十件という寺院が多く存在する。そのため、周辺寺院による支え合い（葬儀への呼び合い）など互助システムが確立されている。

このように各地域において、2重構造といえる寺院組織を有してきたわけであるが、近年その仕組がうまく機能していない。その状況は、鹿児島県においても同様である。鹿児島県では、寺院数が比較的少ないため多くの廃寺は確認できないが、それでも本坊から独立したような寺院や半僧半俗の毛坊主が経営してきたような寺院において廃寺が確認できる。これら事例を比較することにより、寺院衰退の現状と原因を明らかにする。

「葬式仏教」批判の再検討

伊藤悠温（北海道大学大学院）

近年、現代日本における「葬式仏教」としての仏教のあり方が批判的に検討されるようになっており、肯定的な意見、否定的な意見が共に仏教界の内外を問わず様々な方面から主張されている。

論じられている内容としては、仏教界外部からは批判的・否定的な意見が多く、批判の焦点は現在の日本の仏教が法事や葬儀などの先祖供養に専従しており、生者ではなく死者を主な対象としている点に向けられている。仏教界内部では、主にグリーンケアの観点から「葬式仏教」としてのあり方を擁護的・肯定的に捉える意見も見られると同時に、批判的な意見に対する仏教界の反省として、仏教寺院での音楽会の開催や平成版寺子屋など様々な取り組みを通じて社会参加に努めようとする動きも増えつつある。

しかしこれらの議論を注視していくと、仏教界外部からの否定的な意見はマスメディアによって形成されたイメージに基づくと思われる発言も見られ、正当な評価がされているとは言い難い。また、仏教界の内部においては「葬式仏教」について擁護する立場、批判的な立場など様々な意見が交わされているが、議論が必ずしもかみ合っているとは言えない状況にある。そして、現在のところ「葬式仏教」をめぐる議論においては現代の仏教のあり方のどこに問題があるのかが明らかにされないまま、それぞれの立場で個別に意見が主張され、動きが進められている現状にあるといえる。そしてその要因として、現在の言説の場には「葬式仏教」論と呼べるような議論の土台が用意されていないことを挙げるができるだろう。

こうした現状を背景として、本発表では「葬式仏教」をめぐる多くの意見を分類・分析した上で、これまで指摘されることのないいくつかの問題点を明らかにする。はじめに、現在の意味での「葬式仏教」批判の起源をたどると共に、批判が現れるようになった社会的背景について考察する。次に、新聞記事の内容分析を通して仏教界の内外における様々な意見をそれぞれに整理・検討する。その際、外部からの批判的な意見についてはそれらの主張の問題点を宗教法人の「経営」という観点から指摘したい。仏教界内部の動きについては新聞記事および関係者の著書も利用しながら状況を把握する。そしてその上で、「葬式仏教」を擁護する立場、批判的にみる立場のどちらも、何らかの形で現状からの変革を図る動きがあることを明らかにする。また、しかしながら寺院を取巻く制度的な制約によって行動に移しづらい状況が存在することも指摘したい。

本研究では研究の対象として、現在の意味での「葬式仏教」についての議論を戦後に限定して考察する。仏教に対する批判的な言説は江戸時代の排仏論など古くから存在しており、現代に限ったものではない。しかし本研究は同時代の仏教を批判的に検討することに主眼を置くため、ここでは戦後の一連の議論を指して「葬式仏教」論と捉えることとする。また、本研究は「葬式仏教」論の土台を確立することを目的としており、ここでは様々な出される意見のいずれかに偏重しない立場をとる。仏教界の内外を問わず、個々の立場からの主張はそれぞれ一定の評価をすることができるが、同時に問題点を浮かび上がらせることで、日本の仏教が今後とりうる方向性を見通しを立てていきたい。

本研究では議論の範囲を戦後に限定しているが、この範囲では「葬式仏教」論を確立するだけの文献や資料が十分と言えない部分がある。また、いずれはそれ以前までの仏教批判の議論と並行して考察する必要性も出てくるとと思われる。しかし、様々な意見が様々な立場から個別に主張されている現状において、意見の集約や立場による分類を試みることは今後の議論の進展に必要な作業であり、そのために対象とする範囲を限定することは、考察を進める際に有効だと考えられる。

岡正雄を読み直す
—現在の神話学から—

平藤喜久子(国学院大学)

日本の民族学の基礎を築いたとされる岡正雄(1898-1982)は、戦後の比較神話学にもっとも大きな影響を与えたと評価された。彼は1929年にウィーンに渡り、W・シュミットやハイネ＝ゲルデルンらウィーン学派の歴史民族学者たちのもとで学ぶ。その成果として、日本文化について、複数の文化複合が、それぞれ異なった時代に渡来することによって醸成された、多層的、多起源的な文化であるという仮説を学位論文「古日本の諸文化層」("kulturschichten in Alt-Japan")で展開した。この論文は刊行されなかったが、1948年に江上波夫、八幡一郎、石田英一郎との座談会「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」でその内容が報告されると、席上で江上波夫が「騎馬民族説」を唱えたこともあり、大きく注目された。岡は、神話を文化複合の要素を分析する際の重要な手がかりと位置づけていた。戦後の日本の神話学は、大林太良に代表されるように彼の影響を強く受けており、とくに日本神話の系統論については、岡の仮説を出発点とし、それを修正、補強しつつ展開してきたといえる。この点で岡への高い評価は当然ともいえよう。

他方、岡については、戦時体制下で民族研究所の設立に尽力し、その実質的な中心となっていたため、民族学の戦争協力の代表的存在という面から学説史のなかでとらえ直そうとする研究もみられる。筆者もファシズム期の日本において神話学がどのように時勢とかわかっていったのかを論じるなかで、岡正雄について取り上げて論じてきた。

この岡正雄の研究が、いまあらためて注目されている。未公開で幻の論文とまでいわれていた「古日本の諸文化層」が、2012年にドイツで刊行されることになり、教え子であるヨーゼフ・クライナーや2006年に岡の資料を譲り受けた明治大学を中心に、岡の学説の形成過程や学説史上の位置づけについての研究がはじまっている。日本語版の出版も企画されているという。

これらの動きを受け、あらためて神話学の視点からも岡の研究を読み直す必要があると考えた。神話学では、近年いくつかの注目される新しい研究視点があらわれてきている。その背景には、遺伝子工学の発展により人類史の再建についての議論がかなり詳細にできるようになったことがあるだろう。母親からのみ伝えられるミトコンドリアDNAを遡ると、16万年～20万年頃にアフリカに存在したとされる系統にたどりつくという。この人類のアフリカ起源説は、よく知られるようになったが、人類がアフリカからどのような形で現在のように広がっていったのか、すなわち出アフリカ後の人類の移動のプロセスとそれぞれの移動の時期については諸説ある状況である。

神話学にとってこの議論は、比較研究にあらたな視点をもたらすことになる。他文化間で似ている神話がみられる場合、似ている理由は、神話だけではなく言語や物質文化、儀礼などを比較し、共通の起源を有するものなのかどうか検討することになる。そこに人類史の再建についての議論も踏まえる必要が出てきたということである。神話資料と数千年前の人類の足跡の話と論じることは、たしかに困難ではあるが、これまでの議論に新しく、かつ重要な論点がでてきたことは確かである。

加えて、神話学には神経生理学(neurobiology)、脳科学の視点も必要であるという議論も出ている。この視点によれば、文化的な交流のない複数の地域の神話にみられる共通のモチーフのうち、たとえば英雄神話などは、人類の脳が社会的な側面に発達したことによって生み出されたものである可能性が高いという。

本発表では、こうした議論が行われている現在の神話学のなかで、日本神話の多起源性、多層性を論じた岡正雄の研究は、完全に過去のものなのか、それともそのなかにもいまの研究と交差する部分はあるのかという点を考えてみることにする。

神社神道と国際化 —アメリカ椿大神社の例—

石黒弓美子(國學院大學大学院)

アメリカ・ワシントン州・シアトル市の郊外に「北米で初めての」神社ができ、近年特に正月等の参拝者や崇敬者の数を急激に増やしている。「アメリカ椿大神社」という神社で、三重県鈴鹿市にある「椿大神社」のアメリカ分社である。当初の設立の目的は、戦前「海を渡っ」てハワイなどに建てられた神社のように、移民として海外に渡った日本人の生活習慣上のニーズや宗教文化的ニーズを満たすことでもなく、また、アメリカ人を積極的な布教の対象としようというものでもなかった。むしろ、日本と戦争をしたアメリカ人に神道を理解してもらうことによって、世界平和推進の一助としたいとの意図で造られたものである。しかし、結果として、アメリカ人の崇敬者を急増させ、一神社としての北米における現地化と教線拡大を実現している。

この神社は、ワシントン州シアトル市郊外のグラニット・フォールズという小さな町に鎮座する。シアトル中心部から高速道路を車で1時間以上も行かなければならない「辺鄙な田舎」にあり、交通アクセスも決して便利ではない。ところが、近年、この神社では、正月の参拝者は、毎年3が日で数千人に上り、崇敬者の数も数百人を数える。正月は歳旦祭から始まり、年始の初詣、2月の節分祭、6月の夏越の祓、秋祭等々、日本にある神社と変わらない祀りに大勢のアメリカ人が、広大なアメリカ各地から集まる。

また、2010年10月には、同神社のフェイスブックが立ちあげられ、そのメンバーは、わずか1年ほど後の2011年12月14日の時点で1200人にも迫り、日々その人数は増え続けている。そのフェイスブック上では、日本語の祝詞が紹介され、英語でその意味が説明されている。自宅での神棚の祀り方なども紹介され、日常的に神道に関する質疑応答や意見交換がなされている。しかも、メンバーは、大半が日本人ではなく、外国人である。日本人・日系人もいるが、全体の10%程度とマイノリティである。もちろん、フェイスブック上でのやり取りは英語であるが、神道用語はローマ字で日本語が飛び交う。

この神社の神主はローレンス・コウイチ・バリッシュという白人のアメリカ人である。神道に関心を持ち、アメリカに椿大神社の分社ができた(1987年のことで、当初はカリフォルニア州ストックトン)と知ると、現地を訪ね(1988年)、その後は7年にわたって度々鈴鹿市の椿大神社を訪れ、神祀りを修行した人物である。つまり、グラニット・フォールズのアメリカ椿大神社は、アメリカで現地の言語と文化を理解する現地人によって神社が運営されている初めてのケースであり、それは、神社神道が初めてアメリカにおいて真の意味で「現地化」を遂げたケースであると言える。

さらには、最近特に顕著になってきている英語の世界共通言語化と、瞬時にして世界中どこにいても、同時に大量の人々との情報のやり取りを可能にしたフェイスブックというソーシャル・ネットワーク・サービスを活用することにより、神道が、国籍や人種、或いは、民族的、文化的背景に関わりなく世界各地の老若男女に受け入れられるという意味での「グローバル化」を遂げつつある初めてのケースでもある。

本論では、アメリカ椿大神社の現況、設立の経緯および略史を紹介し、神社神道の「現地化」と「グローバル化」進展の過程、およびその要因を検証する。また、そのグローバル化の過程において、神社信仰にどのような変化が起きつつあるかを考察する。

併せて、フェイスブック上で筆者が行った同神社の崇敬者と「フォロアー」というべき人々のプロフィール調査と、ミニアンケート「なぜ神道に魅かれたのか」の集計結果も紹介し、アメリカに出来あがった「アメリカ神道コミュニティ」(American Shinto community²)の性格を考察する。

1 井上順孝『海を渡った日本宗教 移民社会の内と外』弘文堂、1985。

2 Ishida, S.S.(2008). *THE MAKING OF AN AMERICAN SHINTO COMMUNITY*,
http://etd.fcla.edu/UF/UFE0021551/spaidishida_s.pdf 2008 2009/3/30。

開港期濟州島における仏教復興の起源について

全惠松(神戸大学大学院)

これまでの研究では、濟州島は特徴的なシャーマニズムの信仰に関心が寄せられてきたが、歴史的には、仏教の信仰がきわめて盛んであった。新羅時代の濟州島は「500の寺と500の祭堂」という言葉で知られており、同地では、巫俗信仰の祭堂に匹敵する数の仏教の寺院が建立され、人々の厚い信仰心のよりどころとされてきたと伝えられている。特に仏教は、高麗時代(918~1392)から朝鮮時代初期にかけて、広く信じられていた。仏教を国教としていた高麗王朝に仕えた貴族の中には、儒教を国是とする朝鮮王朝の体制を拒み、自らの意思によって辺境の地である濟州島に移住したり、朝鮮王朝への反逆者として濟州島への流刑に処せられたものが数多く存在した。高麗王朝の貴族たちの親仏教的傾向は、濟州島の島民に影響を及ぼし、朝鮮王朝になってからも15世紀ごろまで仏教に対する信仰が続いたと伝わる。

濟州島での仏教弾圧は、朝鮮王朝第19代国王である肅宗によって派遣された濟州牧使、李衡祥(リ・ヒョンサン)によって始まった。1702年、李衡祥は濟州島にある一切の仏教寺院と祭堂を破壊し、以来、濟州島には一寺の仏教寺院も祭堂も残されることはなかった。このとき、濟州島の仏教は、完全に根絶されたと考えられる。再び、濟州島で仏教が信仰されるようになったのは、それから200年後のことである。

蓬廬觀比丘尼は、仏教が途絶えた20世紀初頭の濟州島で仏教の復興に大きく貢献した人物である。1908年、彼女は、濟州島で「觀音寺」という仏教寺院を建立し、觀音寺を中心に精力的な布教活動を行った。濟州島仏教は、蓬廬觀比丘尼による仏教布教活動によって息を吹き返したと言われている。一般に、日本統治時代には、濟州島に限らず、朝鮮半島全域にわたって、日本仏教諸派による仏教布教活動が盛んに行われ、仏教寺院の再建などにも寄与したとされているが、実は蓬廬觀比丘尼のような在来の尼僧や僧侶による仏教復興の動きも盛んであった。本研究で取り上げる20世紀初頭の濟州島における仏教復興と蓬廬觀比丘尼が果たした役割は、近現代韓国・朝鮮宗教史研究における重要なテーマでありながら、これまでまったくと言ってよいほど研究されていない。反呪術的啓蒙主義や「反日」史観が支配的な韓国社会・韓国仏教界では、呪術的傾向の強かった当時の仏教や、朝鮮総督府による法要等に関与していた蓬廬觀比丘尼に対し、かなりの偏見があったものと考えられる。本研究では、「千年王国運動」[コーン 1978]と呼ばれる宗教運動の概念を手がかりに、植民地統治下の濟州島民の精神的・宗教的需要を公平な視点でとらえ、資料をもとに蓬廬觀比丘尼と觀音寺の役割について考察したい。

本発表では、200年余り仏教が途絶えた濟州島にどのようにして仏教が復興したのかを論じる前提として、朝鮮時代末期から日本統治期に入る時期の政治・社会情勢に着目する。朝鮮王朝の政治的權威の失墜は、濟州島と濟州島の民衆にどのような影響を与え、それがどのようにして仏教復興に結びついていったのかについて、考察していきたい。とりわけ、当時、濟州島で起きた多数の民衆反乱に共通する原因となっていた租税制度の問題について取り上げ、また、機能不全に陥った制度に抵抗する民衆運動としての性格をもった新宗教の興隆について検討する。そして蓬廬觀比丘尼は新宗教が取り込んでいたきわめて呪術的色彩の濃い仏教実践の形態に接したことがきっかけで、大伝統としての仏教を希求し、彼女による仏教の布教が濟州島での仏教復興へとつながっていたという点について考察を行う。

韓国系キリスト教会の日本宣教 —なぜ日本人信者を獲得できているのか—

中西尋子（関西学院大学）

キリスト教が根付きにくい日本において韓国系キリスト教会が活発な宣教活動を展開している。1989年の韓国における渡航自由化以降に来日するニューカマーの増加とともに韓国のキリスト教会が都市部に支教会を設立したり、単身で来日した宣教師が教会を開拓したりするようになったが、いまや日本各地に存在していると言ってもいいくらいである。開拓された韓国系キリスト教会が日本のキリスト教教派に加入したり、韓国から来日した宣教師が日本の教会の担任牧師になっている場合もある（申光澈・中西 2011）。

日本人にとってキリスト教は欧米からの宣教師によってもたらされた（もたらされる）ものというイメージがある。韓国の宣教師が伝えるキリスト教は「本場」のキリスト教なのだろうかと思う人もいるかもしれない。さらに「韓流ブーム」を経て現在でこそ韓国は身近な国になったが、一昔前は「近くて遠い国」だったし、韓国に対して偏見を持つ人も少なくなかった。また宣教の難しさから日本は「宣教師の墓場」とも言われる。韓国系キリスト教会は二重三重の困難を抱えながら日本宣教を展開しているわけである。しかし教会にもよるが、ニューカマーの信者が大半とはいえ、ある程度の日本人信者を獲得している教会もある。もともとキリスト教信仰があり、韓国系キリスト教会に所属を変えた（転会）という人だけでなく、韓国系キリスト教会で受洗し信者になる人もいる。

本発表では、韓国系キリスト教会の日本宣教のあり方を明らかにするとともに、なぜキリスト教の信者がなかなか増えない日本において日本人の信者を獲得できているのかを問題にする。

これまで韓国系キリスト教会についての研究は谷（1995）、白波瀬（2007）、李賢京（2009）などによるものがある。ただ、これらは日本におけるエスニック社会の宗教として、あるいはホームレス伝道という枠内でとらえられていたり、日本の教会では満たされない人々の霊的渇きや現世利己的な願望を韓国系キリスト教会は充足させているという指摘にとどまっていたりする。

一般の日本人が何かをきっかけに韓国系キリスト教会に接し、転会あるいは信仰を持つようになるまでの過程には、種々の要因があると思われる。それらを経て韓国系キリスト教会の一信者になるのだが、その要因を含めて検討した日本人信者の獲得要因については、いまだ十分明らかになったとは言い難いように思われる。

そこで発表では、まず日本における韓国系キリスト教会のおおよその数や分布、教会類型などを概観する。そして礼拝に出席し、日本人信者への聞き取り調査から得られたデータをもとに、新来者への対応、聖書勉強（弟子訓練）、礼拝の様子や活動のあり方といった教会による教化の側面、それとともに個々の信者の入信過程を見ながら、日本人信者の獲得要因について検討したい。

日本人信者の獲得にある程度成功している韓国系キリスト教会には、およそ次のような点が見られる。韓国の教会という性格を極力なくす、ニューカマーの韓国人が多数を占めても日本人信者が疎外されず、両者が分離・対立することなく共に安定した教会生活を送れるような場を提供、日本人も執事やその他の役職に起用する、韓国系キリスト教会で受洗し信者になる日本人はクリスチャン・ホームの出身でない、などである。

本発表のそもそもの問題関心は韓国系キリスト教会の土着化にある。在日同胞を宣教対象として始まった在日大韓基督教会、社会問題化している統一教会も韓国からの外来宗教であり、それぞれが独自の展開を見せているが、その一つとして韓国系キリスト教会を取り上げたい。

東アジアにおける宗教意識と伝統的な価値観 —国際比較調査のデータ分析—

真鍋一史（青山学院大学）

I. 問題の所在

国際比較調査では、多くの場合、「宗教意識と価値観」に関する質問諸項目が取りあげられてきた。そして、欧米においては、「宗教意識」と「価値観」が深く結びついていることが検証されてきた。他方、東アジアにおいても、これまでの先行研究では、「宗教意識」と「価値観」は強く絡み合っており、両者を切り離すことはできないという考え方が一般的であった。ところが、そのような通説を国際比較調査のデータ分析をとおして体系的に検証するという試みは、いまだ十分になされていない。今回の研究発表は、そのような試みについて報告するものである。

II. データ分析の方法

データ分析のために利用するデータ・セットは、世界価値観調査（WVS）「国際社会調査プログラム（ISSP）」「アジア・バロメーター（AB）」「アジアン・バロメーター（AnB）」「東アジア価値観国際比較調査（EAVS）」である。データ分析の具体的な方法は以下のとおりである。

1. 分析の対象とする国／都市は、日本、中国、韓国、台湾、シンガポール／北京、上海、香港、昆明、杭州である。
2. データ分析では以下の諸変数を取りあげる。
 - (1)宗教・宗派・教団（religious denomination）
 - (2)宗教的実践（religious practice）
 - (3)宗教に関するそれ以外の変数：①宗教的信念（religious beliefs）②宗教の重要性（importance of religion）③宗教心（religiosity）
 - (4)ソシオ・デモグラフィック変数：①世代（generation membership）②教育程度（level of education）
 - (5)伝統的な価値観：①名声（fame）②親密な関係（relatedness）③保守意識（preservation）④調和（harmony）⑤男女の役割（gender role）⑥先祖を敬う（respect ancestors）⑦孝行（piety）
3. データ分析の方法としては、「ステップワイズ法による重回帰分析（Stepwise Multiple Regression Analysis）」を用いる。

III. データ分析の結果

①宗教意識と価値観との関係は小さい。②宗教意識とソシオ・デモグラフィック変数との関係は小さい。③宗教意識と国／都市との関係はそれぞれの国／都市ごとに異なる。

IV. 考察

これまでの通説からするならば、以上の結果は意外なものといわなければならない。measurement に関する方法論的な検討が、今後に残された重要な課題となる。

ふたりの宗教家にみる準戦時の救癩思想

輪倉一広（福井県立大学）

カトリック思想家で救癩施設「^{こうやまふくせいびょういん}神山復生病院」の第6代院長（1930-1940）の岩下壮一（司祭）と救癩施設「^{みのぶ}身延深敬病院」を創設し、財団法人身延深敬園の初代理事長（1920-1970）兼院長（1906-1970）の綱脇龍妙（日蓮宗僧侶）の各救癩観を、昭和の軍国主義が闊歩した1930年代に焦点を当ててとらえてみるのが本発表の目的である。

そもそも日本におけるハンセン病の救療事業（＝救癩事業）は、もっぱらキリスト教や仏教の宗教家によって始められた。岩下は、5代続いたパリ外国宣教会所属のフランス人院長の後を請けて1930年に邦人初の院長となった。また、綱脇は日本救癩事業史上唯一の仏教系救癩施設を創設した。1907年に法律第11号「癩予防に関する件」が公布されて以降、公立（のちに国立に移管）の癩療養所が設けられるようになるが、それらがえてして「管理と拘束」の場となったのに比べ、宗教上の救癩施設はあくまでも慈善や慈悲の場として公立とは一線を画す位置にあった。

だから、宗教の慈善や慈悲が国家権力やそれに伴う全体主義イデオロギーとの緊張関係の中で、倫理的にどのように機能したのかが問われなければならない。今、教理的な側面に限って整理すれば、たとえば法華経は「諸法実相」を説いており、これは仏性（または仏種）という人間本性に備わる究極の価値存在を認めて、そこから平等性を説いている。しかし、その一方で現実の個人と社会との不平等な倫理関係には目を瞑ることになる。それゆえ、その論理は現実の固定的理解を否定（＝空）することにより、結果的には現実肯定がなされるのである。

他方、カトリシズムにおいては、トマスの共通善思想のもと近世哲学が常套とする二元論的思考から解放されて個人倫理と社会倫理とが合一的に把握され始める。したがって、そこでは個人と社会（全体）との平等な倫理関係——すなわち一致——が目指されることになる。しかし、それであっても権威秩序が絶対的な与件となることから、結果的には個人と社会との不平等な倫理関係には常に注意が払われつつ既存の権威に従うことになる。つまり、現実に対してはとりあえず否定にも肯定にも判断を下さないことになる。

しかし、本研究の眼目であるところであるが、こうした教理の側面に加えて、全体主義が強まる準戦時体制下での救癩施策ないしはそのイデオロギーを強く意識せざるを得なかった宗教救癩事業家という側面を検討することは、国公立療養所の場合のような外在批評でとらえられた公的な〈救癩〉とは異質な宗教救癩事業の解明にとって欠くことのできないものである。それゆえ、本発表では岩下と綱脇のそれぞれに内在した戦争観、皇室観、そして慈善・慈悲の実践思想を切り出し、可能な限り包括的に整理してみたいと思う。

結論を先取りして言えば、岩下はカトリシズムに基づく国家権威を支持する立場から、軍国主義体制への協力を是とし、また皇恩への報謝を患者と一体となって具現化しようとした。そして、患者たちが現実世界である天皇制ファシズムの中に包摂されてこそ主体性を確立することができるかと確信し、彼らが癩の宣告によって喪失していた主体の再形成を図ろうとした。

他方、綱脇は『法華経』の「常不軽菩薩品」の経説に基づく「我深敬汝」の立場から半ば公然と反戦の態度を社会で表明するとともに、身延深敬病院の患者たちにもそうした態度を宣言していた。それはまた、綱脇からみれば法華経の謬説ととらえられた田中智学の折伏的・覇者的な主張への反論でもあった。そして、綱脇にとっては患者個人の主体性への関心は薄く、それよりも患者たちへの〈同苦〉意識に端を発した、大乘に基づく「仏性の発動」としての「大慈悲」が救癩実践の推進力となった。

日本におけるスピリチュアル・ブームと現代西洋エソテリズム

ヤニス・ガイタニディス（國學院大學）

一時メディアをにぎわせたスピリチュアル・ブームは終わりを告げようとしている。その現象の一つの特徴としては、正統的な知識とかつて区別されていたオカルト・カルチャーのみで表明される「烙印を押された知識」（マイケル・バーガン指摘している *stigmatized knowledge*）が注目されてきたことがあげられるだろう。しかし、そのプロセスの内実が明らかになっているとは言い難い。スピリチュアル・ブームにおいては、通俗化され、カスタマイズ化され、また、再解釈された「オカルト」的理論が数多く存在していた。また、スピリチュアルなものに関心をもつ人びとが、海外で流行していた、いわゆる「ニューエイジ的」な知識や実践を日本に輸入していたといった事例も数多くみられる。もちろん、こうした現象は、スピリチュアル・ブームにのみに特徴的なことではない。19世紀以来、西洋スピリチュアリズムとそれに続く神智学等の運動が、日本の宗教界に多大なインパクトを与えたことはすでに多くの研究が指摘している。また、1848年のアメリカが発祥とされる近代スピリチュアリズム自体が、エマヌエル・スウェーデンボルグの思想やメスメリズムなどの複数の西洋のエソテリックな伝統を組合せ、大衆化した運動であるということも明らかになっている。

本発表では、日本と西洋エソテリズムの間の約150年におよぶ交流の一例として、日本における「ダスカロスのサークル」を扱う。ギリシャ語で「先生」を意味する「ダスカロス」は、小学校の教員を指すことが多い語ではあるが、さらに一般的に人生の「師」や「指導者」というニュアンスも含む。キプロス島に住み、霊能者のような存在であったスティリアノス・アテシュリス（1912年—1995年）は、地元の相談者たちから、この「ダスカロス」という名で呼ばれていた。1980年代、キプロス人の社会学者に見出された彼は、次第に世界的に知られるようになり、80歳にしてニューヨークやロンドン、ドイツで講演を行うほどの存在となった。遅咲きではあったが、ニューエイジ運動の一人の担い手であるといえる。

そして、1989年ダスカロスのもとにニュージーランド生れのギリシャ人画家、ハラランボス・ランベルがやってくる。彼が現在の日本におけるダスカロスサークルの代表である。彼は、ダスカロスに会う以前に日本を訪問しており、日本人と結婚していたために、日本との結びつきが強かった。その縁で、ダスカロスが亡くなってから、ダスカロスに興味をもっていた日本人に誘われ、東京でダスカロスの教えを説く講演を行った。それは日本でスピリチュアル・ブームが起り始める2001年のことであった。同集団は現在も、ダスカロスが生み出した「真理を探究するためのシステム」というキリスト教的なエソテリック思想を中心に据えて活動している。

本発表では、まず日本で知られる以前の「ダスカロス」の思想について検討し、日本に取り入れられた理由について考察していく。そして、ダスカロスの思想が日本に受容されて10年経った現在、この独特な西洋エソテリック思想がどのように「日本的」変容を遂げたのかを明らかにしていくことによって、日本的「スピリチュアル」と西洋エソテリズムの関係について考えていく。

代替療法における「近代的であること」の問題化とその背景 —手当療法「レイキ」を事例として—

平野直子(早稲田大学)

本報告は、「レイキ」と呼ばれる代替療法⁽¹⁾を題材に、宗教研究の中でこれまで示されてきた代替療法についての知見——「近代的であること」を問題化するという傾向、宗教と近接する特徴など——を再検討すると同時に、現代日本において代替療法の選択や実践を支える社会的文脈を明らかにすることを目的とする。

近年の宗教研究においては「宗教」という概念の歴史性・構築性が問われ、従来の宗教の枠におさまらない宗教「的」現象へもアプローチしていくことが試みられてきた。代替療法はそれにあてはまる現象の一つとしてしばしば取り上げられ、田邊信太郎らによる明治末から昭和初期に生み出された「癒し」の技法の研究(1999)、島菌進によるマクロビオティックや森田療法の研究(2003)、吉永進一による明治末から大正期の「精神療法」の研究(2007)のような成果が生み出された。上記の諸研究は、主に戦前日本にルーツを持つ療法や健康法を取り上げ、そこに「近代的であること」を問題化する独特の論理や、宗教と見紛うような「世界観」(島菌 2003: 229)があること指摘する。またそうした特徴が、それらが生み出された時代や社会と結びついていると同時に、20世紀末における代替的知や「癒し」を求める風潮と連続性を持つということも示した。

一方、21世紀に入ってから、健康ブームや癒しブーム、スピリチュアル・ブームといわれる風潮が続き、身体へ働きかけるさまざまな商品や技法が氾濫している。こうした状況において、先行研究が示した代替療法についての知見の有効性を再検討し、さらに深めていく必要があるように思われる。また近年普及した代替療法のなかには、2010年夏に医療忌避による死者を出したと糾弾された「ホメオパシー」のように、社会的に問題とされるものもある。こうしたアクチュアルな問題に対し、医療専門家とは違った社会科学の視点、特に宗教研究の視点がどう活かされるのかということにも、目を配る段階に来ているだろう。

そこで本発表では、大正期に日本で生まれ、現在世界で500万人が実践しているともいわれる手当療法「レイキ」(霊気療法、REIKI)を取り上げる。レイキは上の先行研究が扱った代替療法とほぼ同時期に「精神療法」として生まれ、その後はしばしば中心となる指導者を欠きながらも、ニューエイジやスピリチュアル・ブームのなかで読み替えられ、現在まで生き残ってきた。ここではその歴史や特徴を概観した上で、フィールド調査および文書資料から収集された、レイキ実践者やその周辺から発される言説を分析する。

これまでの代替療法についての研究は、一般の実践者にどのように意味づけられ、受け入れられているのかという点への記述が少ない傾向があったが、本発表では実践者たちの語りにも注目することによって、「近代的であること」を問題化する言説や宗教との近接性という特徴がレイキのなかにも見られることを示しつつ、それらが医療や健康にとどまらず広く現代社会に普及している一種の対抗文化的価値観やライフスタイルとどのように関係しているかを、明らかにすることを試みる。

(1) ここでは「通常医療」(近代科学の方法に基づく医療)によらない治病・健康維持法を指す。

参考文献

- 島菌進 2003『〈癒す知〉の系譜 科学と宗教のはざま』吉川弘文館
田邊信太郎・島菌進・弓山達也編 1999『癒しを生きた人々 近代知のオルタナティブ』専修大学出版局
吉永進一 2007「精神の力——民間精神療法の思想」『人体科学』16(1): 9-21

認知科学・脳科学と日本の新宗教研究

井上順孝(国学院大学)

認知科学や脳科学は、人間の認知、思考の特性を非常に幅広い視点から議論しており、宗教研究も宗教の起源、宗教が人間社会に果たす機能、宗教的思考が他の思考と異なるのかなど、かなり根本的な問いへの再考が促されている。認知科学が展開する上で、当初もっとも関わりがあったとされる学問領域は、哲学、心理学、人工知能、ニューロサイエンス、人類学で、このうち心理学、言語学、人類学は、従来から宗教研究と関わりが深い。宗教心理学、宗教人類学という分野があるし、言語学と神話研究は関わりが深い。これら宗教学に関連する研究分野は、当初から認知科学に目を向けていたわけで、宗教研究も認知科学や脳科学の成果に目をそむけるわけにはいかない。

宗教の具体的なテーマに即して考えるなら、進化心理学は宗教の発生に関わる議論をおこなっている。長い狩猟時代に適用してできあがった脳の反応と、農耕社会以後に求められるようになった反応といった区分は、宗教の起源論の再考を促す。マキャベリの知性仮説(社会脳仮説)、心の理論(ToM)などは、大脳皮質前頭葉の機能と複雑な社会や人間関係の構築・維持との関わりに注目する。これは信仰共同体が生まれたり、そこででの結束が維持される根拠が、他の共同体とは異なるのかどうかという問いをもたらす。

人工知能、ニューロサイエンスの急速な発展は、宗教運動や宗教文化の拡散や終息についての新しいモデルを提供しようとしている。W.S.ベインブリッジは、*God from the Machine* において、コンピュータ・シミュレーションという方法を用い、時間の経過により宗教所属がどのような変化のパターンをとりうるかを例示している。

D.カーネマンの行動経済学は、人間が合理的選択をしない理由を認知バイアスなどに求めている。認知バイアスは宗教的信念を議論する場合にも検討すべきものである。宗教行動は非合理的なものであるとする議論がしばしば見受けられるが、仮にその非合理性が宗教以外の行動における非合理性と同じメカニズムなら、宗教行動の非合理性を特権化できない。

R.ドーキンスの利己的遺伝子、ミーム理論には多くの批判があるものの、これに影響を受けた議論は数多い。K.E.スタノヴィッチは『心は遺伝子の論理で決まるのか』において二重過程モデルを展開する。人間にTASS(The Automatic Set of Systems)と分析的システムという二重の認知機能を想定している。これは宗教と呪術が切り離せないものであることを考える上で、きわめて参考になる。

ヨーロッパでは2006年に国際認知宗教学会(IACSR)が設立され、宗教現象について人文科学、社会科学、自然科学、健康科学からの学術的、科学的な研究を目指している。中心メンバーの一人H.Whitehouseは、宗教性のdoctrinal modeとimagistic modeを仮説的に提示し、これを宗教の変化や展開を論ずる際の解釈ツールにしようとする。

こうした研究の流れの中で、日本の宗教研究はどういう関わり方をもちうるであろうか。認知科学・脳科学は文化的差異のみならず、その底にあって人間に共通する認知機構を探ろうとし、先史時代から現代までを視野に入れている。学際的な議論を繰り返しているため、日本の宗教研究も、これまで積み重ねてきた宗教史や現代宗教についての資料・データと分析方法が、どのように関係づけられるかを検討せざるを得ない。

本発表では、日本の新宗教の教えや活動の特徴、また新宗教に対する社会的評価をめぐる問題などを、検討の俎上に乗せてみる。これまでの新宗教研究で提起されている発生理論、入信理論、組織論、教義論などが、認知科学・脳科学の成果の導入によって、どのような新しい展望が開けるのかを考察する。

「宗教的情操」概念の誕生 —明治20年代の教育言説から—

齋藤知明（大正大学大学院）

本発表の目的は、明治20年代の言説空間で「情操」がどのような文脈で使われていたのかを検討し、日本において「宗教的情操」概念が誕生した契機を明らかにすることである。日本の宗教教育の議論（政府答申・教育研究双方）でたびたび用いられる「宗教的情操（教育）」は、戦前は“人格の陶冶のため”、戦後は“生命に根源に対する畏敬の念を育成するため”との理念が掲げられている。しかし、それは果たして実態がともなっているのかという疑問も常につきまとう。「宗教的情操（教育）」の定義を試みた研究は数多いものの、一方で「宗教的情操」の概念そのものに疑問を呈する研究もある。ここでは、そのような論争的な「宗教的情操」について、「情操」が使われ始めた明治20年代まで遡って、なぜ「宗教」と「情操」が結びついたのかを中心に考察する。

先行研究では、「情操」概念が日本で使われ始めたのは心理学の分野からであったとされる。明治10年代の導入当初は何か「傾注」する心理状態だったのが、明治30年代以降は「高次な感情」など価値ある感情として定義される。しかし、「情操」という概念は、その後の心理学ではあまり重視されなくなり、他方で教育を語る言説において占有される。その理由の一つとして考えられるのが、導入当初の心理学が、心理学で得られた知見を教育理論や教育実践に適用していたということである。つまり、当時の教育言説は心理学に多く依っていたと考えられ、「情操」もその流れで使われていたのではないだろうか。

そこで、当時の教育言説で「情操」がどのように使われているのかを検討するために、明治20年代における教育学・倫理学・心理学等の分野の刊行物を参照した。今回用いたのは、①宮川鉄次郎『心理学』（M23）②能勢栄『実践道徳学』（M24）③ジョンネー『倫理学（惹涅氏）』（M23）④久保田貞則編『教育学』（M24）⑤コンペーレ『教授論（根氏）』（M24）⑥安東辰治郎『人倫道徳要旨』（M25）⑦井上円了『日本倫理学案』（M26）⑧日下部三之介『心理学百問百答』（M26）⑨著者不明『修身学初歩』（M29）の計9冊である。これらの著作は、「節」や「項」で「情操」を立てている。検討した結果、以下のことが明らかとなった。

1つ目は、心理学用語として使われていた「情操」は、明治20年代においてすでに教育言説で使われていたということである（「情操」の使用状況）。

2つ目は、「情操」には3種類あり、「知（智）育」「美育」「徳育」の3方面でそれぞれ特性を持っていると考えられていたということである。さらにいえば、「知（智）育」「美育」「徳育」での「情操」はそれぞれ「真」「美」「善」といった価値への希求と言い換えることが可能である（「情操」の目的）。

3つ目は、当時は（あるいは、当時も）、「情操」をめぐる具体的な教育法というのは確立しておらず、抽象的に“「情操」はすばらしい感情である、だから良いものに触れさせて伸ばすべきである”との一辺倒で「情操」が記述されていたことである（「情操」の育成法）。

最後に、「宗教」と「情操」が結びつくとき「情操」の希求する先が「ゴッド」ではなく「宗教の本性」であったことが挙げられる。言い換えれば「情操」は、「真善美」と合わせて「聖」を得られる概念として語られていたのである（「宗教的情操」の誕生）。その点が「信仰」と「情操」、「believe」と“sentiment”を分ける鍵となると考え、本発表ではその論理展開について時代状況を踏まえながら報告する。

在日ムスリムのイスラーム教育の変遷 —イスラミック・サークル・オブ・ジャパンの事例—

川崎のぞみ（筑波大学大学院）

本発表では、在日ムスリムたちが彼らのモスクで行っている教育活動の変遷について概観し、その中での「日本人ムスリム」の意味の捉え直しについて指摘し、在日ムスリムのアイデンティティの変化について考察したい。

バブル期に労働者としてイスラーム諸国から来日した外国人ムスリムを中心に、現在、日本では10万人弱のぼるムスリム（在日ムスリム）が生活しており、彼らと結婚し改宗した女性とその子供たちを中心に1万人ほどの日本人ムスリムもいる。在日ムスリム・コミュニティは30代から40代の子育て世代と学齢期の子供たちが中心となっており、子供に対するイスラーム教育は最大の課題の一つである。

外国人ムスリムが定住化し日本人ムスリムが増加する中、日本人ボーン・ムスリムとして生まれた子供のイスラーム教育において重要となるのは、子ども自身が周囲の「普通の日本人」の中で自らスカーフの着用や礼拝・食事規定の実践などの差異を表明することを受け入れることである。そのため、モスクでのイスラーム教育や家庭での生活を通じてそれを納得できる信仰心を涵養することが重要となる。しかし、教育の中心的役割を担うべき母親が結婚によって改宗した日本人であり、イスラーム教育を受けたことがないために、以前は日本で子供をムスリムとして育てることは難しいとの見方が大勢を占めていた。

子供へのイスラーム教育の活動は、1990年代はじめから各地のモスクでボランティアに行われ、試行錯誤が重ねられてきた。クルアーン暗唱教室は最も基本的な教育であり、最初期から行われている。教えるのは母国で暗唱訓練を受けた外国人ムスリムであり、クルアーンの内容よりも発音や正しい読み方が重視されていた。しかし、生活のすべてに及ぶ規範を持つイスラームにおいて、それだけでは「よきムスリム」になることはできない。そのため、2000年代頃から子供を父親の母国等に移住させたり、全日制のイスラーム学校を作ろうとする動きが出てきたが、これらの教育方法は、子供の信仰心やムスリムとしてのアイデンティティの涵養には不十分であったり、子どもの教育を父方母国や学校に預けてしまうことによる親の放任、学齢期以降の日本社会での適応等の問題があり、十分な解決策となりえていなかった。

在日ムスリムとその子供たちが増加し、将来の父方母国への帰国という選択肢が薄れていく中で、日本でムスリムとして生きていくということがより重要視されるようになってきている。そこで、現在活発に行われているのが「イベント型」のイスラーム教育である。本発表では、在日パキスタン人と日本人を中心とするイスラーム団体「イスラミック・サークル・オブ・ジャパン（ICOJ）」が開催している「一日タルビヤ学校」を事例として取り上げる。そこでは海外でイスラームの専門教育を受けた日本人講師により、「日本で生きるためのイスラーム」を理念として、礼拝作法やクルアーンの暗誦よりも、まず子供自身がイスラームに関わることを楽しむことが目指され、多様な方法や教材が用いられている。こうした教育方法はICOJの定期的な子供クラスにも還元されており、日本人講師の人脈を通じて各地のモスクの子供・日本人女性クラスにも取り入れられている。そしてそこでは、かつてのイスラーム教育においてはハンディキャップとされていた「日本人ムスリム」であることが逆に「よきムスリム」であるために有益なものとして肯定的に捉え返されていることが指摘できるのである。

長崎くんちとランタンフェスティバルにおける祭り空間

章潔（長崎国際大学）

長崎くんちの日になると、各踊町のシンボルである傘鉾が立ち、家々が提灯や幔幕で飾られ、日ごろ平凡な町内は華やかな祭り空間に姿を変える。しかし、近年、日本のほかのまちと同様に、長崎においても、都市化の進展に伴って、伝統的な町家が減って現代的な建物が増えるようになった。こうした影響を受け、くんちの伝統的な空間利用と演出の形態は伝統的町家のビル化や非木造化、駐車場などの新しい空間の増加によって大きく変化しつつあるのである。

一方、ランタンフェスティバルの諸会場は主に新地中華街をはじめとする長崎市中心部商店街などである。旧正月になると、祭りの各会場は数多くの色鮮やかなランタンに彩られ、幻想的な空間へと変貌している。特に「盛り場」である商店街が祭り空間の演出により、松平誠の言葉を借りれば、もともと非日常的な「ハレ」の場所から更なる「ハレハレ」の世界へと変容していく。このように、378年の伝統を持つ長崎くんちと異なり、1994年からスタートしたこの新しい祭りは、祭り空間の演出と利用において、現在の長崎市街地の建物に相応しい特徴を持つ装飾の工夫が求められている。

これら二つの祭りそれぞれの祭り空間は、単に町の道や施設、町並み及び住居などから構成された物理的な空間だけではなく、そこに住んでいる人間の生活が繰り広げられる継続的な場としての人文・社会的空間でもある。本発表は、このような視点に立って、長崎を舞台として展開される長崎くんちとランタンフェスティバルにおける祭り空間の演出と利用の実態を記述し、両者の比較を通して、祭りのあり方と町の構造、住民、まちづくりとの関わりなどを考察したい。

これまで、まちづくりの視点から祭りと空間に関して考察した研究は、ほとんど見当たらないが、都市学、民俗学、建築学などの視点では数多く蓄積されてきた。その代表的なものは以下のとおりである。まず、久留島浩は「長崎諏訪神社祭礼図屏風」などの画像史料から、近世の長崎くんちと町空間の特色を読み取り、城下町祭礼としての特質をもっていることを明らかにした。谷直樹と増井正哉は祇園祭りを支える社会的基盤の現状を明らかにし、町並み、通り、建物などの空間的基盤の活用課題について検討した。村田明久は長崎の町家の特徴を詳しく解明し、大きな成果を得た。田中重好は地域社会の共同性に着目し、戦後の「住宅の閉鎖化」と「中間空間」の喪失について独創的な見解を示した。

本発表は以上の先行研究の成果を踏まえて、まちづくりの視点から長崎くんちとランタンフェスティバルにおける祭り空間を考察・分析しようとするものである。その考察の要点は、次のとおりである。①現在の長崎市街地の混乱した景観、新しい建物の閉鎖性と室内空間の固定した利用形態とは、長崎くんちが成立した近世長崎における伝統的な町空間とは対照的である。建物のビル化が進行し、町並みの連続性が失われた町においては、祭りの完結性、ストーリー性ともに捉えにくいものになってしまう。②新生のランタンフェスティバルの祭り空間を構築する象徴の中には、春節や元宵節の聖なる意味内容を表すものもあれば、それらの聖なる意味に対応する内容が欠けているものもある。しかし、現在では様々な象徴を混用することが日本の祭りの多くにおいて共通の性格になりつつあることは否めなく、神・神社などの純粋に聖なる象徴しか使わない祭りのほうが、むしろ珍しくなっていると言えよう。③道などの屋外空間は、かつては近隣者同士の付き合いの場であったが、現在ではその機能は急速に喪失されていっている。また、道が自動車の通路になることにより、人間が自由に行動できる空間が急速に失われてしまい、道を歩きながら両側の町並みや、そこに垣間見られる生活を肌身で感じるゆとりも失われてしまった。こうした道を祭り空間にすることは、道が本来持っていた「コミュニケーションの場」という意味を人々に再認識させ、人間関係を再構築するための契機になり得る。

タイ北部における女性キリスト者の思想形成 —チュリーパン・スィーソントーンを事例に—

藤原佐和子（同志社大学大学院）

1970年代末期に萌芽し、1980年代から展開され始めた「アジアの女性たちの神学」は、1960年代のアメリカ及びヨーロッパにおける女性の視点によるキリスト教の再解釈（フェミニスト神学）が中産階級・異性愛主義・白人の女性を、第三世界における解放神学が男性キリスト者を主たる担い手としたのに対し、アジアの女性キリスト者を担い手とする比較的新しい分野である。アジアの女性キリスト者たちの試みの制度的基盤はアジア・キリスト教協議会（Christian Conference of Asia）の女性デスク、第三世界神学者エキュメニカル協会（The Ecumenical Association of Third World Theologians, EATWOT）の女性委員会、アジアの女性キリスト者の国際的組織であるアジア女性資料センター（Asian Women's Resource Centre for Culture and Theology）とその学術雑誌 *In God's Image*（1982年創刊）であり、その方法論としてEATWOT女性委員会が提案した「3つの循環的段階」（①個人的状況の聞き取り、②社会的分析、③神学・思想的分析）がある。発表者は、この分野における研究の例外的な少なさ、全人口の1%弱と目されるキリスト者数において日本と共通するタイに着目し、プロテスタント教会の中心地であるタイ北部に拠点とする最大教派タイ・キリスト教団（Church of Christ in Thailand）を背景に持つ3名の女性神学者の思想を中心に分析している。その中で最も世代の若いチュリーパン・スィーソントーンは他の2名と比較して論文の発表が少ないが、現在、パヤップ大学マクギルバリー神学校において教会カウンセリングを講じる神学者であり、タイ北部におけるプリズン・チャプレンシーを牽引する牧師であることから、タイ北部における女性キリスト者の思想形成を研究する上でその存在は欠くべからざるものである。19世紀末にアメリカ長老派の宣教師によってもたらされたキリスト教思想は、土着の文化・宗教性を否定する絶対主義的な傾向を持ち、タイ北部のキリスト者コミュニティを地域社会から孤立させるものであり、宣教師の影響力は1970年代に至るまで強固に維持されたと見るのが通説であるのに対し、チェンマイ市内の仏教徒の家庭に育ち、幼少期に地域社会の宗教行事等を経験しているスィーソントーンの関心は教会や神学校の外にまで及んでいる。スィーソントーンは西洋的バイアスに規定された牧会者（牧師）モデル、信徒との関係、地域社会との関係、カウンセリングの方法を批判的に再考することによって、タイ北部における実践的な神学の不在を指摘し、地域社会・文化に適応した牧会カウンセリングの在り方を提唱しており、その思索のプロセスでは社会学、歴史学、人類学を引く「社会的分析」が多用されていることは注目に値する。この研究発表では方法論に注目し、本人との対話から得られた情報を適宜参照しながら、1995年にボストン大学に提出された博士論文“A Contextual Approach to Pastoral Care and Counseling in Northern Thailand”を主たる資料としてスィーソントーンの思想を読み解いていく。

バリ島仮面舞踊劇トペンの演者増加とその背景 —1970年代との比較から—

吉田ゆか子（筑波大学大学院）

本研究の注目するトペンとは、インドネシア共和国バリ州の寺院の周年祭（*odalan*）、結婚式、火葬など、各種の宗教儀礼において上演される仮面舞踊劇である。演者は、バリやジャワの王朝時代の物語ババッド（*babad*）を基調にしながら、コメディ、時事的話題、教義の解説などを挿入しつつ語る。更にこの演目は、儀礼の成就を導くという重要な機能を有しており、演者は「トペンの僧侶（*manku topeng*）」とも呼ばれる。発表者の調査地では、1970年代と比べてトペンの担い手が、大きな数的増加をみせている。本研究は、ギャニャール県で行った2つの村の事例研究より、この演者増加の背景を明らかにし、またその現象がトペンの実践自体に与えた影響を考察する。

かつては、トペンの中でも、1人の演者が様々な仮面を付け替えながら演じる形式「トペン・パジェガン」が主流であった。このことも関係して、先行研究は、トペンを、一握りの高い技術を有する名人によって担われる演目として描く傾向にあった。しかし、発表者がフィールドで目にしたのは、トペン演者として広域に名を馳せる名人から、地元集落や親戚や友人などから依頼を受け細々と上演活動が続ける者まで、いわば玉石混淆の演者たちが活動する姿であった。また現在は、1人で上演する形式よりもむしろ、複数人で役柄を分担する形式が主流となっている。そのため踊りが苦手な者も、語りが苦手な者も、複数人で互いの不足を補いながら上演を成立させている。そしてその演者数も決して稀少であるとはいえ、芸道家や僧侶たちからは、トペン演者が近年非常に増えているのだと繰り返し語られた。幅広い層の人々がこの芸に参加するようになった社会的要因はいかなるものであろうか。

トペン演者の増加の直接的な原因は、儀礼規模の拡大に伴う上演頻度の上昇である。トペンは、各種の儀礼がある一定の規模以上で開催される場合に上演される。バリの人口の9割近くを占めるヒンドゥー教徒たちは、インドネシア共和国に生きる宗教的マイノリティーとして、自己の宗教や文化に対する意識を先鋭化させてきた。この現象は、経済発展とも相まって、人々が益々多くの財と労働を投入して大規模な儀礼を開催する傾向を生んでいる。結果、トペン演者の活動機会は飛躍的に増加した。また、盛大に儀礼を催すのみならず、自らがその中で中心的な役割を担い、儀礼に貢献することを望む者たちも多い。そういった人々（特に成人男性）にとって、トペン上演は魅力的な選択肢の一つとなっている。

芸の習得チャンネルの多様化も指摘できる。父親や伯父から芸を学んだり、有名演者に弟子入りしたりといった習得方法は70年代当時から現在までも一般的である。しかし加えて現在は、芸術系・宗教系の高等教育機関が、多くの芸道家や宗教知識の豊富な人材を毎年輩出している。また、それらの研究教育機関や州政府が催す芸能関連のセミナーでは、かつて各地域で曖昧さを含みながら伝承されていたトペンに関わる様々な知識が公に出され、議論され、明文化されていった。他方、20世紀後半から、歴史物語ババッドや教義に関する知識が書籍や雑誌を通じて次第に流通した。トペン上演に有用なそれらの知識の中には、もともと神聖な古文書ロンタル（*lontar*）に記され、様々な禁忌と結び付いていたものもある。活字媒体は、それらの知識をも、誰もが手に取り得る存在へと変えていった。これらのことは、これまで世襲で受け継がれることも多かったトペンの芸をより多く人々に開かれた存在としたのみならず、かつて人々が抱いていたトペンや演者への畏怖の感覚を低減させ、更には、村落の貴重な情報源としての役割をも担っていたトペン演者と観客との関係を変えていった。

性にかかわる暴力と宗教の変容 —インドの農村の事例を中心に—

山下明子（世界人権問題研究センター）

発表者は2010年からインドの農村の貧困女性たちの経済的自立に関して調査（科研）を行っている。主な調査対象地とは20数年来のかかわりを持っている。近年、経済的、社会的な変化が著しく、これまでカースト社会の最底辺にいた女性たちの意識も変化しはじめ、行動範囲も広がっている。

発表者は地元のダリット（「不可触民」）女性のNGOによるインド政府のマイクロクレジット（無担保小口融資）政策と結びついたセルフ・ヘルプ・グループ（S.H.G. 自助グループ）づくりに注目し、その内容および地域の女性たちの変化を調べてきた。NGOのS.H.G.つくりとリーダーおよび会員用のトレーニングは、たんに貯金の方法や融資の受け方にとどまらず、貧困女性のエンパワーメントが主力になっており、そのための方法に工夫がこらされてきた。インドの農村社会で幾層もの暴力に晒されて生きてきた女性たちが自らをエンパワーできるためには、幾つもの条件がある。その第一が宗教文化によって内面化したジェンダーの意識である。個人の力でこれを破ることはむづかしい。

宗教とカーストによるコミュニティの分断・破壊状況は、近年、年中選挙だらけで利益誘導型の政治が進むにつれて、農村でますます色濃く現れている。地方政党には特定のカーストまたはカースト連合のものが多い。この要にあるのが、「性のカースト制」ともいえるインドのジェンダー・セクシュアリティのシステムである。そこで、同じカーストや宗教のコミュニティ内でS.H.G.がつくられるのと、会員がカーストや宗教をこえて混じっている場合とでは、女性たちのエンパワーの質が異なってくる。地域のS.H.G.同士の交わりにおいても同様だから、カーストをこえてダリットも交われる新たな質の自立的な地域コミュニティづくりをNGOはめざしていた。

インド政府のマイクロクレジットとS.H.G.政策は1996年から大きく変化し、母体のNGOからの切り離しが進んできた。役所と銀行はもとよりS.H.G.自体の運営の仕方にその結果が出てきている。村に闇金融も入ってきている。一方で低カーストや農村の貧困家庭を対象にした中央政府のさまざまな優遇政策があり、購買力がでた女性たちの考え方も生活も変化してきている。政治の領域では女性議員のためのクォーター制もあるが、実際に力を行使しているのはその夫や父親である。とくに問題なのは、性にかかわる暴力が増えていることである。個人面談で多いのが夫からの暴力であるが、カースト間の恋愛や結婚による「名誉殺人」、子ども（男子）を「産めない」ための暴力、日常的なレイプも絶えない。「未亡人」への差別も宗教を問わない。

本発表では、当該地域のヒンドゥーを中心に、イスラーム、キリスト教会などが、信徒の要求に沿ってそれぞれに変化している様子を、ジェンダーの視点から検証する。日本とは異なり、宗教意識がつよく、宗教的行為が日常的である国で、なぜ性にかかわる暴力が放置されるばかりか、これに加担さえするのか。制度的な家父長制が原因であるのか、強制異性愛主義が問題であるのか。性はどの宗教においても単に信徒のモラルの問題ではない。発表者は、一昨年に当学会のテーマセッション「脱中心化の神学——マージンからの声」で「性暴力と宗教的ナショナリズム—日本軍「慰安婦」問題を神学する」を発表した。

宗教はなぜ性的な暴力の原因または加担者となってしまうのか。

現前と不在のあいだ
—東日本大震災に関する宗教学的試論—

滝澤克彦（東北大学）

本発表は、東日本大震災がもたらした様々な現実に対して、実証的な宗教研究が築き上げてきた諸概念や思考様式がどの程度有効であり、どのような限界をもつのか、また、より有効な言葉遣いを、この震災を契機としてどのように作り上げていくことができるのかを、発表者による聞き取り調査などの資料を軸としながら考察を試みたものである。

2011年3月11日に発生した大地震に伴う東日本大震災は、社会的現実や個人的経験の様々な場面に重大な変化をもたらしてきた。その変化はあまりにも大きすぎたため、あり続ける世界に対する社会的あるいは個人的な基本的信頼の構造が根底から動揺させられたことになる。例えば、社会空間がかなりの割合で壊滅してしまった地域においては、そこに埋め込まれていた社会関係や記憶の繊細なバランスが一掃されてしまったため、新たな社会空間において別の信頼構造の早急な再構築が求められた。かつて現前したものの不在のなかで、震災後の社会過程は、過去の記憶をたよって再編成しようとする力と、まったく新たなものを構築していこうとする力とのせめぎ合いとなる。そのような過程において「民間信仰」や「慰霊」、宗教的な「共同性」といったものがどのような動因となっていくかを明らかにすることが本発表の目的である。また、その作業の結果として、そのような宗教学的諸概念が今回の事象をとらえるにあたり、どの程度有効／無効であるかを検証することとなるが、そのような意味でこの震災を極めて動的な状況下における宗教学的分析の在り方を模索する一つの重要な契機であるととらえたい。

具体的には、岩手県の三陸沿岸部に位置する一被災地域における宗教民俗調査や民間巫者・宗教者などへの聞き取り調査などをもとに、当該地域における祭や年中行事、巫俗などの「民間信仰」が震災以降の社会においてもっていた意味や社会関係に及ぼしてきた影響について分析する。特に、ここで「民間信仰」とは、すなわち震災前の記憶や連続性と結びつけられていくようなものであるが、そこに、新たな意味合いでの「慰霊」や「祈願」が加わってくるときの動態に注目する。

さらに、同じ地域において、発表者が震災後まもなくから現在に至るまで継続的に行ってきたある遺族に対する聞き取り調査にもとづき、社会的次元と個人的次元の「あいだ」に焦点を当てながら、震災のもつ宗教学的意義について考察する。特に、話者の語りのなかで「生」や「死」、「死者」、「慰霊」といったものがどのように捉えられ、どのように変化してきたかを分析する。それを通して、死が個別的なものではなく集合的なものとなった特殊な状況下で、それらの観念が社会的次元と個人的次元のあいだで往来する様態を、宗教学的にどの程度とらえられるかを検証したい。

本発表のタイトルにある「現前」と「不在」は、その主語として生者、死者、街、日常など様々なものを含意している。一方で、特定の主語を置いていないのは、今回の事象においては、現前したものの喪失と新たなものの生成の動きのなかで、主語がもはやその主語ではなくなっている事態が考えられるからである。また、ある種の信仰にもとづく「信頼」によって「現前」と「不在」を結びつけていくことが、時間と空間の感覚に対してもつ意義を社会学者のギデنزが示唆したが、そのような視座も考慮しながら、自明とされる時間や空間を解体し、世界に対する信頼構造を支えている信仰と実証的に対象化される信仰との関連を見ていくことがひとつのポイントではないかと考えている。

宗教的変数「『宗教的な心』は大切である」の有効性

○横井桃子（大阪大学大学院）

川端亮（大阪大学）

日本の宗教社会学における調査研究には、いくつかの問題がある。まず、質的研究が数多く行われている一方で大規模な量的調査は少ない。また世界価値観調査や ISSP 調査などの国際比較調査による研究が数多く行われるという世界の研究状況の中で、日本の宗教は国際比較の枠組みで分析されていない。その背景には、日本の宗教や宗教研究の特殊性がある。

日本で宗教を信仰している人は全体の 3 割で、世界的に見てかなり低い割合である一方、墓参りには約 6 割、初詣は約 1 億人が参詣している。特定の信仰がないにも関わらず、初詣などの宗教的行事に参加する人々は少なくない。また、欧米の一神教的宗教観に対して日本では多神教的、汎神論的な宗教観が広く一般的である。宗教研究においても、欧米ではキリスト教社会をモデルとした「世俗化」論や「チャーチ=セクト」という宗教組織の類型が前提とされる一方、日本では「借傘型・内棲型・提携型・自立型」（西山）、「隔離型・個人参加型・中間型」（島薮）、「いえモデル・おやこモデル・なかまー官僚制連結モデル」（森岡）など、欧米とは異なる日本固有の概念・用語が数多く生み出されている。

このような日本の特殊性が存在しているにも関わらず、量的調査を用いた大規模データの国際比較では、宗教に関する質問項目はキリスト教社会を前提としたワーディングとなっている。たとえば、ISSP の調査項目に設定されている”There is a God who concerns Himself with every human beings personally” の賛否を問われても、日本人には馴染みがなく答えにくい。日本を国際比較の対象として研究するためには、日本でも欧米でも共通して測定できる宗教性を確立する必要がある。

欧米の研究では、宗教的属性（信仰や教会出席）と政治、ボランティア活動、満足感など様々な変数との関連が計量分析によって明らかにされており、社会の中での宗教の重要性が示されている。しかし、日本においてはいずれの変数との関係もほとんど検証されていない。日本においても宗教と社会意識や他の様々な行動とが関連深いことを示すことができれば、計量的調査研究の興隆とともに国際比較研究の発展につながるだろう。

統計数理研究所は、1953 年より 5 年ごとに「日本人の国民性調査」を実施し、1958 年より「宗教的な心は大切か」という質問項目が継続して調べられている。1987-92 年の 7 か国国際比較調査では、「大切だと思う」と回答する割合が日本では 75%と、アメリカ（87.3%）・イタリア（86.0%）に次いで高い。

本報告ではこの「宗教的な心は大切か」という変数に着目し、統計数理研究所と大阪大学の共同研究であり、SSP (Stratification and Social Psychology) プロジェクトによる「格差と社会意識についての全国調査」の 2010 年面接票データを用いて、前述した政治、ボランティア活動、満足感だけでなく、その他の意識・行動変数についても分析を行った結果を報告する。「宗教的な心」変数は投票行動やボランティアや利他的活動、ハイカルチャー活動、保守的意識などに関連していた。欧米の調査研究とその構造が類似しており、日本における「宗教的な心」変数は、欧米の計量研究における信仰や教会出席などに機能的に等価な質問文である可能性が考えられる。

付記

この研究は、SSP プロジェクト(<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>)の一環として行われたものである。SSP-I2010 データは、統計数理研究所共同研究プログラム（23-共研-4504）に基づき、SSP プロジェクトの許可を得て使用している。

在宅での看取りを支えた死生観と Belief —がん患者遺族インタビューに基づいて—

井藤美由紀（京都大学）

1. 病院で死ねない時代の到来

終戦直後、日本では8割以上の方が自宅で亡くなっていたが、その30年後には病院死の割合が自宅死の割合を上回り、さらにその30年後には、病院死の割合が8割を越えた。戦後60年で、日本では病院で死を迎えるのがすっかり当たり前になった。その一方で、2003年、実に56年ぶりに100万人を越えた日本の年間死亡者数は、以後毎年増加し続け、2038年には170万人近く死亡するとの推計結果が発表されている。近い将来、「病院で死ぬのが当たり前」の時代は、否応なく終焉を迎える運命にある。

2. 一般に流通している見解

ところが、2008年に厚生労働省が実施した「終末期医療に関する調査」では、「自分自身の身に、6ヶ月以内に死期が迫っていると告げられた場合、自宅で最期まで療養できると考えるか」を問うた設問に、「実現可能」と回答した人の割合は、わずか6.2%にすぎなかった。「実現困難」だとした人々が挙げた最大の理由は、「家族に迷惑をかける」ということだった。

3. 家族に迷惑はかかっていたのか？

そこで、自宅で家族を看取った遺族（死別2-3年後）18名に半構造化面接を実施し、家族が末期告知をされてから看取りを経て調査時に至るまでの経験を聴き取った。

結果は、末期告知を機に家族の関係性が大きく変化し、それまでは意識できなかった感情や思いに突き動かされるようにして、終末期がんの家族と暮らしていた様子が語られるケースが大半であった。何らかの苦労があったことは語られても、それを「迷惑をかけられた」という文脈でのみ語る人は、本調査ではいなかったのである。

さらに、主介護者として何度も、或いは何年間も、終末期の家族（近親者）の世話を引き受けて来た複数の遺族には、共通する心性があることが伺われた。それは「宗教っていうんじゃないんだけど、何かある」というような言い方でよく語られ、当事者にその認識はないかもしれないが、客観的には「死生観」、及び「信条」—ここでは Belief と呼ぶことにする—と表現しても差し支えないと思われるものであった。

4. 事例紹介：上原麻里さん（仮名）のケース

本発表では、約4年の間に姉と母親を看取り、調査時は、脳腫瘍（末期）の症状の進行する長兄と一緒に暮らしていた上原麻里さんのケースを、主に紹介する。

上原さんの特徴は、インタビュー調査の質問項目を事前に知った上で調査依頼に応じたはずだが、質問者の意図を汲み取って答えるのではなく、むしろ質問を封じ込めるような姿勢を強く打ち出してきたところにあった。中でも介護苦に関する質問は、上原さんが「辛いことはしてこなかった」と強く主張し続けたため、宙に浮いてしまった。いったいなぜ上原さんは調査依頼に応じたのだろうか。疑問に思いながら対話を続けていくと、上原さんが知らず知らずのうちに育んできた死生観が、彼女の言動を強く規定していたことが、徐々に明らかになっていった。そこで本発表では、彼女の死生観を、その形成に関わった要素も含めて、まずは紹介する。

5. 考察：介護苦概念への抵抗の由来

次に、上原さん以外の遺族が「（看取りに至る介護が）全く辛くなかった」と語ったケースについても簡単に触れ、それらのケースに共通して見られる死生観、及び Belief に関する考察を発表する。

テーマ・セッション要旨

【第一会場（2101） 14:00～17:00】

社会参加を志向する宗教の比較研究

— エンゲイジド・ブuddィズム（社会参加仏教）を考える —

第20回「宗教と社会」学会・創立20周年記念企画

企画者：外川昌彦（広島大学）、大谷栄一（佛教大学）

趣旨説明

外川昌彦（広島大学）

近現代インドの仏教にみる「社会性」—B. R. アンベードカルの仏教解釈から現代インドの仏教改宗運動まで
舟橋健太（京都大学・研究員）

『アヒンサー』をめぐるストラグル—現代チベット仏教の社会参加をめぐる可能性と課題

別所裕介（広島大学・助教）

社会参加仏教として見た台湾・佛光山寺

五十嵐真子（神戸学院大学）

「開発」に参画する仏教—タイ「開発の時代」と開発僧

泉経武（東京成徳大学・講師）

近現代日本における仏教者の社会参加—妹尾義郎の仏教社会運動の試み

大谷栄一（佛教大学）

コメンテーター

宗教社会学から 櫻井義秀（北海道大学）

仏教史学から 奥山直司（高野山大学）

<趣旨説明>

社会参加仏教（Engaged Buddhism）は、世俗化した市民社会における宗教の社会貢献の可能性として注目されている。ベトナム戦争で反戦を訴えたティック・ナット・ハンや非暴力を通して自治を求めるチベットのダライラマなど、仏教的理念に根差す多様な政治運動が知られている。近年では、災害復興や地域開発に取り組む宗教者の取り組みとしても注目されている。ところで、社会参加を志向する宗教運動は、時にナショナリズムとの深い結びつきを生みだし、たとえば近代の日本では、戦時下の戦争協力をも導いたことが指摘されている。また、グローバル化する今日の市民社会では、宗教の脱私事化やトランスナショナルな宗教運動など、宗教と政治が交錯する様々な運動も生みだしている。

本パネルでは、アジアの様々な地域で展開される仏教理念に根差す社会運動の比較を通し、社会参加を志向する宗教の多様なあり方とその可能性を検討する。Engaged Buddhism を、本稿ではランジャンナ[2005]に従い社会参加仏教と訳しているが、その含意は研究者の立場や運動の当事者により多様である。本パネルでは、そのため対象を特定の事例には限定せず、様々な社会的・政治的状况に関わる宗教の諸相を通し、その運動の可能性や課題を検討する。

具体的には、これまで社会参加仏教として取り上げられてきた各地の事例を、それぞれのフィールドを専門とする研究者の視点を通して検証する。その際に指針としたのは、多様な社会的・政治的状况に関わる仏教実践を、(1)地域社会や多様な政治的状况における社会参加の過程として位置づけ、(2)その影響の広がりを多様な社会的文脈を通して検証し、(3)それを通して宗教の社会参加の可能性を明らかにする、という観点である。

なお、本パネルは、「宗教と社会」学会の創立20周年を記念し、学会の活性化を促すテーマセッションのひとつとして企画されている。常任委員会からの注文は、個別の分野を超えた学際的な取り組みにより、特に海外をフィールドとする研究者が日本の研究者と関心を共有し、若手研究者や人類学などの関連分野の研究者が積極的に関わられるような議論の場を作る、というものであった。

企画者の非力のため、そのすべての課題に応えることは難しかったが、本パネルでは、まずは社会参加仏教を手掛かりに、アジアの諸地域で優れた成果を挙げている研究者に報告をお願いすることができた。このような議論を継続することで、社会参加を志向する宗教の、より開かれた比較研究へと繋げてゆければ幸いである。

<参考文献>

阿満利磨 2003『社会をつくる仏教—エンゲイジド・ブuddィズム』人文書院

櫻井義秀・稲場圭信編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社

ランジャンナ・ムコパディヤヤ 2005『日本の社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』東信堂
Queen, Christopher S. and King, Sallie B. 1996 *Engaged Buddhism : Buddhist Liberation Movements in Asia*, Albany: State University of New York Press.

慰霊とツーリズム

企画者 : 木村勝彦 (長崎国際大学)

趣旨説明

歴史の闇を観る—観光都市長崎における原爆慰霊の位置
沖縄の戦跡観光—慰霊から平和学習へ
現代韓国の死者慰霊—濟州島を事例として

木村勝彦 (長崎国際大学)

西村明 (鹿児島大学)

寺石悦章 (琉球大学)

田中悟 (神戸大学)

金世徳 (芦屋大学)

コメンテーター 文化人類学から 白川琢磨 (福岡大学)

宗教社会学から 山中弘 (筑波大学)

<趣旨説明>

ツーリズム研究においては近年、「ダークツーリズム(dark tourism)」というカテゴリーがしばしば用いられるようになってきた。それは、かつて「戦場観光(battlefield tourism)」あるいは「死の観光(thanatourism)」などと呼ばれていた戦跡を対象とする観光のタイプを、戦争・虐殺や自然災害、さらには殉教などにまつわる「負の遺産」としての空間・施設を目的とする観光行動として、より広く理解しようとする試みであると言えよう。そうしたツーリズムの新たなあり方を論じる上で重要な論点となってくるのは、慰霊の問題である。戦争・災害・殉教などによる非命の死者たちに対する慰霊のための空間が観光の対象とされるとき、そうした慰霊空間を成立させている社会的合意や慰霊という宗教的対応そのものはどのような影響を受けるのであろうか。また、そうした慰霊空間としての戦跡や災害地・殉教地を訪れるツーリストは、慰霊空間としての真正性(authenticity)をどのようなものとして受けとめ、それを観光対象とするということをどのように了解しているのであろうか。

ツーリズムにおける真正性の問題については、D.J.ブーアスティンやD.マッカネルをはじめとしてさまざまな研究が蓄積されてきたが、真正性というものがツーリストと観光業者(プロデューサー)、そして観光地の地元住民という三者の相関関係の中で生成されるものだという事はほぼ共通理解になっていると考えてよいであろう。すなわち、ツーリズムの真正性とは、ツーリストにア・プリオリなものとして与えられるものではなく、「ゲスト」としてのツーリストが「ホスト」であるプロデューサーや地元住民との相関関係のなかで、観光対象(観光地)というテキストを解釈していくというプロセスのなかで成立するのである。そうであるとすれば、慰霊空間をツーリストがどのように解釈し、そこにプロデューサーや地元住民がどのように関係しているのかという問題は、慰霊空間の真正性(宗教的意味)を問い直す上で興味深い視点を与えてくれるであろう。

本セッションでは以上のような問題意識のもとに、長崎の平和祈念公園とキリシタン殉教地、沖縄の戦跡公園等を具体的事例として取り上げ、さらに韓国の事例も比較検討の素材としながら、慰霊とツーリズムの関係について議論していきたい。そうした議論を通してまた、東日本大震災の被災地を巡る観光商品がさまざまな思惑の中で販売されるようになっているが、震災によって肉親や友人を喪った被災者たちは、そうしたツーリズムの商品やそれに参加するツーリストをどのように受けとめ、慰霊の問題とどのように折り合いをつけていこうとしているのか、ということについても考えていきたい。

<参考文献>

國學院大學研究開発推進センター編(2010)『霊魂・慰霊・顕彰—死者への記憶装置』錦正社

波平恵美子(2004)『日本人の死のかたち—伝統儀礼から靖国まで』朝日新聞社

池上良正(2003)『死者の救済史—供養と憑依の宗教学』角川書店

Bodone, Ellen and Roseman, Sharon B. 2004 *Intersecting Journeys : The Anthropology of Pilgrimage and Tourism*, University of Illinois Press.

Tribe, John(ed.) 2009 *Philosophical Issues in Tourism*, Channel View Publications.

グローバル化とアイデンティティ

企画者：宮永國子

趣旨説明

宮永國子（ハーバード大学・国際基督教大学）

自己形成の困難から「生体政治工学」の問題圏へ：311以後の＜自己の身体＞の創造

永澤護（個の可能性研究所・東京福祉大学）

夫婦別姓をめぐる議論：家族と伝統を問う視座

薄井篤子（神田外語大学）

911以降の音楽とイスラームと国際社会：ユッサー・ンドゥールのアルバム「Egypt」を例に

島添貴美子（富山大学）

エスニックなかかわりの場としての教会：劇団セロ・ウアチパとキリスト教会

高崎恵（国際基督教大学）

<趣旨説明>

現代のわれわれにとって、グローバル化とは第一に、世界の経済共同体の形成である。しかし、国家や地域共同体は、世界基準の受け入れと同時に、またそうであるからこそ、地域の同一性を獲得しようとする。地域の同一性は、歴史的に形成された価値の体系として、もっとも可視的に表出される。外からの価値の侵入や、それらとのせめぎあいによって、それまでは「あるがまま」の生活空間が、あらためて共同体の同一性の表出の場として見えるように変化する。このパネルではこのような変化を、事例研究として持ち寄り、それぞれの専門分野からの見解を発表する。焦点は、グローバルとローカルのせめぎあいを現場でとらえることにある。現場の観察から始めて、背後のダイナミズムを推理することで、グローバル化の実態を知ろうとする。

グローバルとローカルのせめぎあいは、もっとも単純化すれば、世界基準と地域の価値体系の整合・不整合に図式化できる。しかしここには、この図式に落とし込めない要素がある。この意味で西洋史を代表し、グローバル化をリードして活躍するのは、「超越的な個」である。現代社会でこの集団を代表するのは、科学者の共同体である。この集団は、「知の力」の保持者でもあり、新しい知の創出者でもある。ここには、地域の同一性を超える「アイデンティティ」が生じる。世界史では、新しい知を応用して、古い知の共同体を凌駕することが、繰り返し行われてきた。西洋近代の関心は、地域の同一性ととともに、それを超える個の同一性の成立に、同時に集中している。

個の同一性に関しては、誰でも知っている西洋の事例に、英語の”the I”と”the me”がある。英語では、”the I”には同一性があるので、責任の主体になれるが、“the me”にはそれがないので、たんに刺激反応的ではない。ゆきあたりばったりだ。だから、可視的な生活空間では、”the I”は独立した認識の主体となれるが、“the me”は共同体の価値の体系に埋没するままである。別の言い方をすれば、”the I”は「見る」ことができるが、“the me”は「見られる」だけである。こう考えると、いわゆる世界基準が、経済共同体としての集団的な価値基準だけでなく、例えば、認識の主体としての人格の成立にあらわされるような、それ以上の可能性をも示唆していることに気付く。

現代の宗教は、このような社会状況と人との、どのように対応しようとしているのか。このパネルでは、まずは、世界基準と地域の価値体系のせめぎあいの現場をとらえ、そのうえで図式には、収まりきらない社会現象の意味を、われわれの立場からとらえてゆきたいと考えている。

<参考文献>

宮永國子 2000 『グローバル化とアイデンティティ』（世界思想社）



(佐世保市役所子ども支援課)

一時預かりとは？

保護者のパートタイム就労や、出産・冠婚葬祭等により一時的に家庭における保育が困難となる場合や、保護者の育児に伴う心理的、肉体的負担を軽減するために一時的に就学前までのお子様をお預かりする保育サービスです。ひと月14日以内を限度としてお預かりします。(ただし、勤務や職業訓練、就学等の場合は、平均週3日程度となります。)

利用方法は？

・実施日は原則として月曜日から土曜日までです。
 ・利用には保育所へ申込み手続きが必要です。
 ・持参するものは事前に保育所にお尋ねください。
 ・発病、事故があった場合は医師の診断・治療など応急処置をとるとともに、保護者の方にもご連絡いたしますので、緊急時の連絡先を保育所に知らせておいてください。

託児所のご案内

【実施保育所および利用料】

保育所名	所在地	電話	利用時間	受入れ月齢	利用料(1日)			給食・おやつ代	短時間保育
					0歳	1.2歳	3歳以上		
昭徳保育園	長畑町396-1	59-2015	7:00~18:00	2ヶ月	1,800円	1,600円	1,500円	利用料に含む	有
江永保育園	江永町580	30-8802	7:30~18:30	2ヶ月	2,000円	1,700円	1,500円	利用料に含む	有
三川内保育園	塩浸町13-2	30-8740	8:30~17:30	6ヶ月	2,000円	1,700円	1,500円	利用料に含む	
認定こども園光の子保育園	上原町17-1	38-3314	8:00~18:00	6ヶ月		2,300円		利用料に含む	有
光の子乳児保育園	早苗町551-7	38-2968	8:00~18:00	2ヶ月	2,000円			利用料に含む	有
花高保育園	花高1丁目269-10	38-4329	7:00~18:00	6ヶ月	2,000円			利用料に含む	有
ルンビニ保育園	崎岡町2821	20-5100	8:30~17:30	2ヶ月	1,800円	1,800円	1,600円	利用料に含む	有
有福保育園	有福町773-1	58-5116	8:00~17:00	12ヶ月		1,700円		利用料に含む	有
針尾保育園	針尾西町260-1	58-4354	8:30~17:30	2ヶ月	1,800円	1,800円	1,600円	利用料に含む	有
蘆ヶ丘幼児園	黒髪町2-10	31-6783	8:30~17:00	1ヶ月		1,800円		350円	有
日宇保育所	大和町454-2	31-2502	8:30~17:30	2ヶ月	1,800円	1,600円	1,600円	250円	
保育所海光園	稲荷町19-10	32-7438	9:00~17:00	2ヶ月	1,700円	1,200円	1,200円	300円	有
天神保育園	天神2丁目272-49	31-2664	6:50~20:00	1ヶ月	2,000円		3歳1,500円 4歳~1,000円	利用料に含む	
ひばり保育園	十郎新町80	31-0963	9:00~17:00	1.5ヶ月	2,000円	2,000円	1,600円	利用料に含む	有
みなと保育園	若葉町13-10	31-3291	9:00~17:00	6ヶ月	3,000円	2,000円	2,000円	利用料に含む	有
やまずみ幼児園	山祇町518-1	31-7816	8:30~17:30	3ヶ月		1,800円		300円	有
須佐保育園	須佐町1-9	22-7985	9:00~16:30	6ヶ月		1,500円		利用料に含む	有
天竜保育園	折橋町10-25	23-0832	8:00~18:00	1.5ヶ月	2,000円	1,700円	1,500円	おやつ代1歳~100円 2歳~150円	有
春日幼児園	春日町15-46	22-2015	9:30~16:30	4ヶ月	2,000円	2,000円	1,500円	300円	有
進徳保育園	元町5-24	22-2751	9:00~17:00	10ヶ月		1,800円		300円	有
御船保育所	御船町1-13	22-8637	6:50~20:00	1ヶ月	2,000円	2,000円	1,500円	利用料に含む	有
島地行夜間保育園	島地町5-10	23-0030	7:00~24:00	2ヶ月	2,500円		2,000円	利用料に含む	有
白南風園	白南風町1-16	20-0900	7:00~24:00	2ヶ月	2,500円		2,000円	利用料に含む	有
柚木保育所	柚木町2079-1	46-0125	8:00~18:00	2ヶ月	2,000円		2,000円	利用料に含む	
愛光保育園	松原町223-1	40-8844	8:00~17:00	6ヶ月	2,000円	1,700円	1,500円	300円	有
大野保育所	瀬戸越2丁目3-6	49-3825	8:10~17:11	3ヶ月		2,100円		利用料に含む	有
かいぜ保育園	皆瀬町94-1	40-8854	7:00~18:00	2ヶ月		2,000円		利用料に含む	有
認定こども園赤崎青い雲幼児園	赤崎町596-20	28-0044	7:00~19:00	2ヶ月		2,000円		給食代200円 おやつ代100円	有
日野保育園	日野町780-5	28-3264	8:00~18:00	1.5ヶ月		2,300円		利用料に含む	有
新田保育園	新田町487-3	47-4116	9:00~17:00	4ヶ月	3,000円	2,000円	1,500円	300円	有
大崎保育園	大崎町528-10	26-2125	8:00~17:00	4ヶ月	2,300円	2,000円	1,800円	利用料に含む	有
佐世保市立吉井保育所	吉井大渡54-1	64-2205	8:00~19:30	2ヶ月	1,700円	1,500円	1,000円	300円	
吉井北保育園	吉井町直谷1065-1	64-2027	8:30~17:11	6ヶ月		1,500円		利用料に含む	
おはし保育園	吉井町橋川内486	64-3525	9:00~16:00	2ヶ月		1,500円		利用料に含む	
ひとみ保育園	吉井町立石290-1	64-2324	7:00~19:00	2ヶ月	2,000円		1,500円	利用料に含む	有
世知原保育園	世知原町栗迎263	76-2062	8:00~17:00	2ヶ月		2,200円		利用料に含む	有
ゆりかご保育園	世知原町栗迎89-9	76-2246	8:30~17:00	3ヶ月	1,500円		1,000円	~2歳 300円 3歳~200円	有
認定こども園江迎青い雲幼児園	江迎町猪調915	66-8822	7:00~20:00	2ヶ月		1,380円	1,260円	利用料に含む	有
認定こども園江迎保育園	江迎町長坂25-3	65-2439	8:30~17:30	2ヶ月		1,500円		利用料に含む	
認定こども園御堂青い雲幼児園	鹿町土肥ノ浦87-1	65-3311	7:00~20:00	2ヶ月		1,380円	1,260円	利用料に含む	有
認定こども園歌ヶ浦野の花幼児園	鹿町下歌ヶ浦884-1	77-5666	7:00~19:30	2ヶ月		1,380円	1,260円	利用料に含む	
しとね保育園	鹿町長串1089-7	77-4164	8:00~17:00	2ヶ月		1,200円	1,000円	~2歳 300円 3歳~200円	有

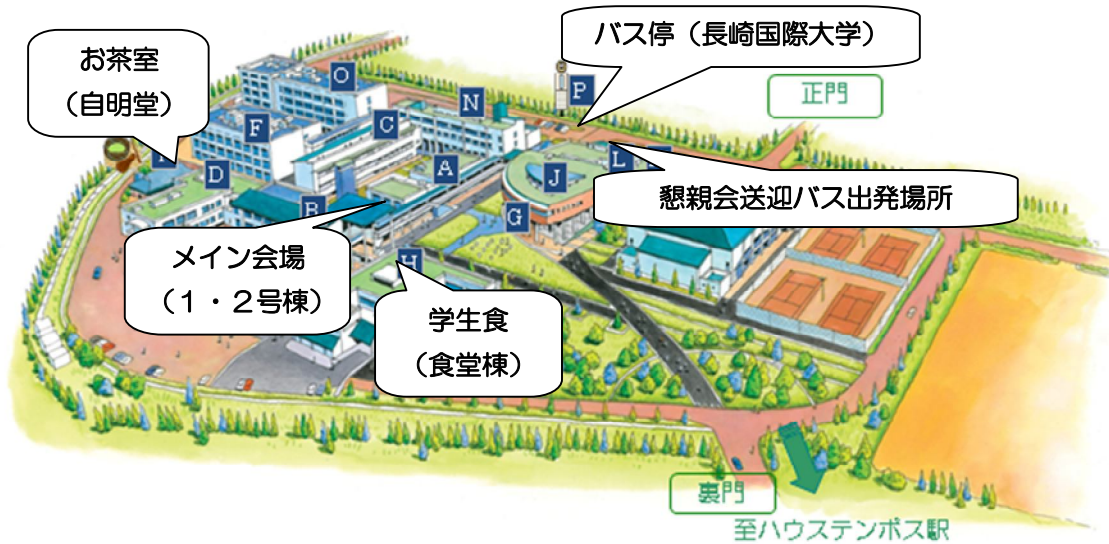
※保育所の行事等により受入れができない場合がありますので、ご了承下さい。
 ※その他、受入れの条件等、詳細については各保育所におたずねください。

佐世保市内無認可一時預かり施設一覧

施設名	所在地	電話番号	定員	開所時間(延長時間含む)			提供するサービス			指導監査基準満たす証明書発行
				平日	土曜日	日曜日	月極契約	一時預かり	夜間保育	
私立保育園マミー	佐世保市天神町1193-4	0956-34-4406	80	24時間体制	24時間体制	24時間体制	○	○	○	○
24時間保育所だかの学校	佐世保市白木町360	0956-24-6887	30	24時間体制	24時間体制	24時間体制	○	○	○	○
ベビーホームちびっ子の家	佐世保市瀬戸越町1235	0956-49-5347	29	7:00~21:30	7:00~21:30		○	○	○	
させほ駅前保育園	佐世保市三浦町1-15上野ビル2F	0956-23-5599	45	24時間体制	24時間体制	7:00~19:00	○	○	○	○
家庭保育園キュービートルーム	佐世保市花高2丁目3-4	0956-38-8526	16	7:00~20:00	7:00~20:00	7:00~20:00	○	○		
ベビーセンター信愛	佐世保市新田町254-10	0956-47-6047	27	7:00~19:00	7:00~19:00		○	○		○
こぼと幼稚園舎	佐世保市早岐1-4-12	0956-39-2778	50	7:00~18:30	7:30~18:00		○	○		○
大野ベビーセンター	佐世保市田原町8-35	0956-49-3951	25	7:00~19:00	7:00~19:00		○	○		○
大宮保育園	佐世保市大宮町39-8	0956-31-8093	86	7:30~19:00	7:30~19:00		○	○		○
さくら保育園	佐世保市大野町21-9	0956-40-8873	33	7:30~19:00	7:30~19:00		○	○		○
愛和幼稚園舎	佐世保市矢岳町5-3中村ビル2階	0956-25-1520	50	7:00~19:00	7:00~18:30		○	○		○
めばえ保育園	佐世保市権常寺1丁目1-5グレースハウス1F	0956-39-4744	70	7:30~20:00	7:30~20:00		○	○		○
とうめい保育園	佐世保市江上町2444-1	0956-58-4011	21	7:30~19:00	7:30~19:00		○	○		
保育サロンこどものそたんぽぼ	佐世保市権常寺町1093-2	0956-26-5222	15	7:30~21:00	7:30~21:00	7:30~21:00	○	○		○
託児所こんたく	佐世保市広田町3丁目40-32ブリムール小田E棟	0956-38-4565	13	8:00~19:00	8:00~19:00	8:00~19:00	○	○		
太陽の子保育園	佐世保市湊町7-5中富ビル1F	0956-76-7775	25	7:00~20:00	7:00~20:00	7:00~20:00	○	○		○
さくのかフワールーム	佐世保市瀬戸越4丁目1401	0956-22-0737	5	10:00~18:30	8:30~18:30		○	○		

交通アクセス

長崎国際大学キャンパス



長崎国際大学へのアクセス



「宗教と社会」学会第20回学術大会プログラム・要旨集

製作

「宗教と社会」学会第20回学術大会事務局
〒859-3298 佐世保市ハウステンボス町2825-7
長崎国際大学人間社会学部 小島大輔研究室
TEL・FAX：0956-20-5562 e-mail: jasrs2012@yahoo.co.jp
大会ホームページ <http://jasrs2012.seesaa.net/>

編集

木村勝彦（長崎国際大学人間社会学部教授）

発行日

2012年5月16日

印刷所

オムロプリント株式会社（TEL：0957-54-7000）